

---

# 門真一馬の愛すべき日常

丸いの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

門真一馬の愛すべき日常

### 【ZPDF】

Z2226Y

### 【作者名】

丸いの

### 【あらすじ】

門真一馬は、放送部に所属する普通の高校生。

今日も彼は、どうみても年下にしか見えない姉と共に、楽しい日々を過ごします。

第01話：5月上旬、火曜日（前書き）

\* 2011年12月26日に少し推敲、加筆修正をしました。

## 第01話・5月上旬、火曜日

僕こと門真一馬の朝は、騒々しい足音から始まる。カドマ カズマ

僕の部屋があるのは、門真家一階の最も奥。

朝になると、生まれたときから知っている少女が、ドタドタと騒がしい足音を立ててそこへとやってくる。

ちなみにその音だけで、僕は既に既に覚醒させられている。

無論それで終わるわけではない。

足音はそのまま僕の部屋まで辿り着くとすぐに、追い討ちをかけるようにノックも無くドアを開け放つて、中へと流れ込んでくるのだ。

そしてその後は自称130cm（4月の身体測定による）と正確には128cm）の小さな身体で僕の上半身に飛び乗り、少し焼けた両腕で僕の肩をつかんで全力で上下に揺らし、僕を起こすために騒ぐ。

「ほーら、カズマ！ もう朝だよ！ オーケーーー！」

聞こえてくるのは、聞きなれた少し舌足らずな、鈴を鳴らしたような可愛らしい声だ。

……いや、音量的には鈴、という形容は正しくない。

どっちかといえば……ベルを振り回したような綺麗な騒音、の方が的確だろう。

うん、こっちの方がしつくづくる。ベルを振り回したような綺麗な騒音。

「うあ……」

そんなことを考えながら、僕は少女のいつも通りの起こし方に、いつも通りのうめき声で答えた。

そのまま目を開けると、見慣れた姿が僕の瞳に映る。

身長は前述の通り約130cm、肌は少し焼けた薄い小麦色で、

元気で健康的、といふのが一目でわかる。

顔も整つており、美少女、と呼んで差し支えないレベルだと思つ。

実際、別の事情もあるが学校でもかなり人気らしいし。

またそんな顔のパーツの中でも、特に印象深いのが勝氣な感じを漂わせている釣り目だ。

その瞳は濁りの無い輝きが宿つていて、純粹そうな雰囲気を漂わせている。

髪は下ろすと肩くらいまでの長さがあり、普段は左右一対のリボンで縛られた いわゆるツインテールにしていた。

リボンは日によって変わっているようで、今日は無地の赤いものを付けていた。

少し記号的な表現をするなら、元氣で可愛らしい小学セ……もとい。元氣で可愛らしい少女、という感じだ。

「おはよっ、カズマ！」

僕の目が開いたのを確認してから、その少女はいつも通りに元氣良く、僕に朝の挨拶をする。

「うん、おはよっ……」

僕も毎朝、僕を起こしてくれる少女……

「姉さん」

現在18歳で高校三年生である僕の姉、門真円(マツカ)に朝の挨拶をした。

挨拶が済んだら姉さんを部屋から追い出して、制服に着替える。

私立阿鳥学園高等学校。

それが僕と姉さんが通う高校の正式名称だ。

ちなみに男子の制服は普通のブレザー。

洗面所に行って鏡を見ると、ちょっと童顔氣味（高校三年生でありながらよく小学生と間違えられる姉さんほどではないが）な顔が映つた。

髪型も昔馴染みの床屋のおっちゃん任せで坊ちゃん刈りになつているせいか、なおさら子どもっぽく見える。

身長は170cmあるから実年齢である15歳、学年で言つと高校一年生未満に見られたことはないのだが、もう少し洒落つ氣は出すべきかもしれない。

しかし面倒くさい、と思つてゐるのが現状である。顔を洗つたり歯を磨いたりしながら、僕はそんなことを考えていた。

それから姉さんと一緒に朝食を済ませて、一人で歩いて学校に向かう。

僕らが通う私立阿鳥学園高等学校、通称阿鳥学園について。  
主な略称はアト学で、特色や特徴などは受験の時に貰つたパンフレットに書いてあつた氣もするが、特に覚えていない。

要するに、僕にとっては家から近いことだけが利点な普通の高校である。具体的には普通に歩いて15分。

「カズマ、そろそろ高校生活には慣れた?」

「うーん……まあ慣れたっちゃ慣れたかなあ」

いつもどおり、姉さんは他愛もない話題を振つてくれる。  
僕もいつもどおり、姉さんの会話に応じた。

「今日で入学してからちょうど一ヶ月だよね。クラスメイトの友達とか出来た?」

「出来てるよ。ってか、色々話してるだり」

「まあそんなんだけどさ。なにか新しい話ないの?..」

「そう言われて少し考える。」

「どうかぶっちゃけ無い。」

そもそも、高校に入つてからはほとんど毎日姉さんと登下校しているのだ。

昨日あつたことなら、昨日の下校時に話題にしている。  
となると、真新しい話になつるのは、以前に話し損ねたことくらいしかないのだ。

「んー……田中が授業中にケータイ鳴らした、って話はしたつけ?..」

「どうわけで、ちょっと前のことで、話したかどうかがうる覚え

な話題を出すことにした。

ちなみに校則では、ケータイは校内での使用は禁止である。

といつても割と甘い教師が多いのか、休み時間ならだいたい見逃してくれる。

しかしさすがに授業中に鳴らしたりすると没収され、放課後まで返してもらえない。

もつとも、僕自身は没収されたことがないので聞いた話なのだが。「えっと、確かに着信音が黒電話だったせいか、ケータイの音だと思われずスルーされた、って話だけ?」

「そうそう、言つてたか」

「昨日聞いたよー。あ、それで思い出した。昨日さ、カナちゃんが「カナちゃん?」

「うん、私のクラスメイトなんだけどね。その子もケータイ、うつかり授業中に鳴らしちゃつてさ」

「ばれなかつたの?」

思い出したと聞いてオチを予想した僕は、気付くとそう<sup>語</sup>いていた。

「ん~……」

姉さんは少し考え込んでから、改めて口を開く。

「えっと、先生にはバレなかつたんだけど……」

「よかつたじや……けど?」

途中までで感想を言おうとしたが、語尾が気になつてオウム返しにする。

「えっとね、その着信音が着ボイスでさ

「着ボイス……ああ、台詞を着信音にしてるやつだけ。ユーチューバーチャンネル! みたいな

ちなみに僕の携帯の着信音はデフォルトの電子音だ。

「そうそう、そういうの。でもさ……それがなんていうの、どう聞いてもアニメのやつでさ」「どう聞いても……って、どんなだったの?」

「なんか必殺技つぽかつた。可愛らしい女の子の声で、スターライト・プラスター！！とか聴こえてきた」

「……授業中にそんなん聞こえて、よくバレなかつたね」

「……授業中に発せられる台詞ではない。

「あ……その子、その時は机に突つ伏してたからさ。『ね、寝言です！』って言いわけでごまかしてた」

「どんな寝言だよ……」

思わず隣の席からそんな寝言が聞こえてくる事態を想像する。うん、僕なら迷わず突つ込む。

「それで『そっか、目は覚めたか？』とだけ言ってスルーする先生も相当なツワモノだとは思つたんだけどね……って、まあそうじやなくて。それでその子、ケータイは没収されなかつたんだけどオタクだってのがバレちゃつてさ。クラスの……男子のオタクグループを毛嫌いしてた女の子達がビーツ接するか迷つてた。なんかぎこちなかつたよ」

「へえ……姉さんも？」

姉さんがそんなことで人を嫌いになるとは思わないけど。

「まさか。ってか私も人のこと言えないし」

「だよねえ」

僕はあつたりと納得の意を示す。

そもそも姉さん自身、若干アニメオタクの氣があるのだから。なにしろ夕方の子供向けのものだけでなく、マニアックな深夜放送のヤツまで観ていてるくらいなのだから。

別に観るのはかまわないんだけど、うつかりホラー系を観てしまつて、怖くなつたからといつて深夜三時頃に僕を叩き起こしてトイレについでいかせるのはやめて欲しい。

「でも私は、それを言つてもオタク扱いされないんだよね」不思議そうに姉さんは呟く。

「そりゃもちろん」

僕は一つの真理を語つてやることにした。

「高校生にもなつてアニメが好きだ、って公言するのは少々違和感があるけど、姉さんなら見た目から言って違和感無い。むしろ相応しいたつ！？」

言い終える直前くらいで、こめかみに激痛が走った。

どうやら姉さん必殺の、上段飛び回し蹴りを食らつたようだ。  
短いスカートで飛び回し蹴りなんて放つたわけだから当然、可愛らしいクマさんが丸見えになつたが姉さんは気にする様子もない。  
もつとも僕自身、いまさら姉の下着など見たつて嬉しくもなんとも無いのだが。

むしろ身内として恥ずかしいからもう少し慎みといつものを身につけて欲しいと思う。

「どうか、こめかみを爪先で貫かれたのが効いていて、その場にへたり込んでいた。

「誰が小学生ですって！？」

だが僕のそんな様子を気にも留めず、姉さんは怒りをあらわにして僕を怒鳴りつけていた。

「それは言つてない……けど下着だって可愛らしいクマさんだったじゃないかっ、それで自分が子どもっぽくないなんてよく言えるね！」

僕も感情に任せて怒鳴り返す。

こめかみへの一撃が効いていて、若干キレていた。

「なによ、やるのー？」

姉さんはそう言しながらファイティングポーズを取る。

その構えは両腕を垂直にあげて顔を守るような体勢で、しいて言うならキックボクシングのそれに近い。

しかし手首が前に曲がっているせいか、どちらかといえばなんか招き猫っぽくなつてしまつっていた。

「望むところだ！」

僕も構える。

こつちは特にひねりのない、あえて言つなら普通のボクシングの

ファイティングポーズだ。

姉さんは小さい身体とすばしっこさを活かして、確実に急所を貫く一撃必殺型の戦い方を得意としている。

だから懷に潜り込まれないようにある程度間合いを取れれば、リーチの差でこっちのほうが有利になる。

つまり、いかに近づかせないかが勝負の分かれ目となる。それはわかっているのだ……。いける! そう思いながら、姉さんとにらみ合う。

そして先手を取ろうと一歩踏み出し、姉さんに横薙ぎの手刀を当てようとした瞬間。

「おっはよう、二人とも!」

突然の襲撃者に姉さんもろとも抱きしめられて、身動きが取れなくなっていた。

「むぎゅう!」

「わ、ひ、ヒロコさん?」

僕は思わず、僕らを抱きしめた人の名前を呼ぶ。

「そのとおり、みんな大好きヒロコさんですよ」と。一人とも、朝から元気そうね?」

姉さんは顔がヒロコさんの胸に埋もれてしまっていて、まともに喋ることすら出来ないようだった。

桜ノ宮広子サクラノミヤコ

姉さんと同じく三年生で、僕と姉さんが所属している放送部の副部長だ(ちなみに部長は姉さん)。

豹のような妖艶で深みのある瞳と、綺麗と表現するのが相応しい整った顔立ち。

背は僕より少し高いくらいで、出るとほほは出でていて引っ込むところは引つ込んでいる、女性としては一つの完成型と言える理想的な体型。

髪型はショートカットで口調もどこか男っぽいのだが、色氣のある声とつっこみがいく大きな胸で性別を間違われることはまずな

いだらう。

もう一度言うが、これで姉さんと同い年である。

正直僕も信じられない。なんというか両極端な一人だと思つ。

「えつと、おはようございます」

ヒロコさんの乱入で戦意を失つた僕は、ヒロコさんのホールドから抜け出しつつ挨拶をした。

「うん、おはようー。そして弟くんはちゃんと挨拶したの?、お姉ちゃんは挨拶しないってのはどうこうことなの、マドカ?」

ヒロコさんは元気に返しつつ、相変わらず顔を胸にうずめたままの姉さんに話しかける。

「むぎゅー！」

姉さんが何か言つている。

とこりうか、良く見るとヒロコさんの肩をタップしてくる。凄く、必死そうに。

もしや、と思って僕はヒロコさんの顔を見る。

なんかいやらしい笑みを浮かべていた。

……ああ。つまりヒロコさん、姉さんで遊んでいるのか。

こんな時、弟として僕がとるべき行動は一つだ。

「じゃあヒロコさん、僕、先に行きますね」

迷わずエスケープ。

ほら、昔から触らぬ神に祟つ無しつて言つしね。

「待つた」

しかし止められてしまつ。

「なんでしょ?」

僕は迷わず、心底嫌そうに返した。

もちろん嫌な予感しかしないからだ。

「お姉さんが苦しんでるみたいだけど、放つておいていいの?」

僕の予感通り、ヒロコさんは挑発するような目で僕に面倒なことを言つてくる。

「じゃあ放してあげてください」

ため息混じりに僕はそう返す。

すると、ヒロハセは「やつ」という嫌な笑みを浮かべて。

「ど・じ・か・い?」

なんてことを、無駄に色っぽく、わざわざ僕の耳元で囁きやがつた。

「どうやらいヒロノさん、中学を卒業してすぐのいたいけな男子高校生に、女子高生に面と向かって「胸」と言わせたいらしい。

「このセクハラ野郎め……いや野郎じゃないけど。

「…………む、ねから…………」

なんだか恥ずかしくなって、顔を逸らしながら言つた。

きこえなーい

「ユロコさんの、む、胸から姉さんを放してあげてください。」

半ばやけくそ氣味に言  
「まー、まー、つと

それを聞いて満足したのか、よつやくヒロノさんは腕のチカラを

解して姉さんを

「やうやく出来ていなかつたらしく、姉さんが田を回してい

た

「せつせつせ、うん、やつぱり姉弟はからかいがいがあるねえ」嬉しそうに言ったヒロ口さんをとつあえず睨みつけておく。ヒロ口さんはいつものんな調子だ。

「カズマもわざわざ、胸、つて言ってくれるし。『腕』つて言えばいいのに」

そしてすぐに視線を逸らした。

自分でも顔が赤くなつているのがわかる。

うしてもせつちに意識が……シ…

さらには僕の考えていることを見通しあり、ヒロノさんはまた

「ヤニヤニやつらしい笑みを浮かべていた。

「さてと、じゃ今朝はこの辺にしておくかな。じゃあ一人とも、また部活で！」

それで満足したらしく、ヒロノさんはさう言い残して、あっさり行ってしまった。

僕はその後、少し慌てて姉さんを軽く介抱してから学校まで走ったのだった。

一限目終了後の休み時間。

「おはよひじぞこます、カズマさん。お疲れのようですね？」

自分の机に突っ伏して、だらーっとしていた僕に、声がかけられる。

のんびり弾いたピアノのよつな、聞いているとビビンか落ち着く綺麗な声だった。

「おはよひ、シズネ」

僕は声の主の名前を呼びながら、ゆっくりと身体を起こす。

顔を上げて、声の主を見る。

そこには、姉さんともヒロノさんとも違つ雰囲気を持つ少女がいた。

桜ノ宮静音。  
シズネ

身長は僕より拳一つ分くらい低いのだが、髪は長く腰辺りまでで、ストレートにしてある。

艶があって、さらさらで綺麗な黒髪なので、そのシンプルな髪型はむしろよく似合っていた。

顔の特徴としては、少し眠そうな顔と、銀縁の眼鏡。

さらに標準装備の笑顔が朗らかな雰囲気をかもし出していて、一緒にいるとなんだか落ち着く。

これでヒロ「さんの妹だといったのだから驚きだ。

「駄目ですよ、カズマさん。夜は早めに寝ておかないと、翌日が辛いですよ?」

「いや、別に夜更かししたわけじゃないんだけど……」「ぐつたりしているのは貴女の姉が原因です、とは思っても言わない。

「そうそう、マドカさんに勧められて深夜3時くらいにやっているアニメを観てみたんですけど……けつこう面白いですね」

「ちょっと待て、さつき自分が何を言つたか思い出すんだ」

思わず突っ込む。

対するシズネは何がおかしいのか気付いていないようだ、不思議そうに首をかしげていた。

その仕草は可愛らしいのだが、それを堪能するより先に僕は前言を一つ撤回しておこうと思う。

シズネは落ち着きがあつて優しいといつ、1つの『理想の女の子』を地で行つているような節があるのだが、いかんせんマイペースすぎて会話のキヤツチボールが成立しないという目を瞑りがたい欠点がある。

つまりまともに会話していると疲れるのだ。突っ込む点が多くて。

「それにしても……最近は、下着を着けないのが普通なのでしょうか

「は?」

ああ、またシズネさんが何か言い出した。

「昨晚観ていたアニメで、角度的に下着が見えているはずの場面があつたんですが、肌の色しか映つていなくて」

……なんて説明したらいいんだろう。

つていうか、僕も姉さんに誘われてたまに観てはいるんだけど、興味無いやつは流し見だつたりウトウトしながらだつたりするのであまり詳しくはない。

姉さんに聞いたら詳しく述べてくれそうな気もするんだけど。  
つかシズネさんどこを見るんですか。やっぱりこの人、ヒロ

「さんの妹だ。

「えつと……」

「そうそう、昨日のお夕飯なんですが　」

「おおーい！」

返答を迷っている間（数えてなかつたけど多分十秒未満）に次の話題に移ってしまった。

まあ答えも思いつかないしいいか。

そのまま相槌という名の突っ込みを返しながら、僕は楽しくも疲れる休み時間を過ごしたのだった。

そんな感じで午前中の授業が終わり、昼休み。

他のクラスメイトたちが弁当箱を開いたり購買や食堂に向かって走り出す中、シズネも僕に声をかけてくる。

「参りましょうか、カズマさん

「うん、行こう」

簡潔に返す僕。

どこになんて聞き返す必要は無い。  
行き先は、既に決まっているから。

そう。

僕と姉さんと、ヒロコさんだけでは無い。  
シズネもまた、放送部のメンバーなのだ。

続く。

第01話・5月上旬、火曜日（後書き）

初投稿作品、いかがだったでしょうか。  
楽しんでいただけたのなら幸いです。

## 第02話：5月上旬、火曜日2（前書き）

時系列的には1話の直後。

2011年12月26日に一部推敲、加筆修正をしました。

## 第02話・5月上旬、火曜日2

昼休み。

僕は放送部の一員として、放送室にいた。  
といふか今着いた。

室内では、既に一人の先輩が今日の放送の準備を始めている。

一人は良い意味で高校生っぽくないグラマラスな外見と、セクハラエロオヤジな内面を持つ副部長、ヒロコさんこと桜ノ宮広子。  
もう一人は小柄すぎて小学生にしか見えない三年生で放送部の部長、姉さんこと門真円。カドマダカ

二人とも今は、ちょうど今日使う予定の資料を選出しているところだった。

「あれ、シズネは？」

現れたのが僕一人だったのが不思議だったのか、着くと同時にヒロコさんが僕にそう訊ねてくる。

「もうすぐ来ると思いますよ。ちょっと寄り道していく、って言ってましたし」

確かに教室を出た時は一緒にいた。ただ途中で別行動になつただけだ。

「寄り道か……トイレだな。あの子昔からそう言つし」

「ヒロコ……それは察しても言わないであげてよ」

ヒロコさんの余計な明言化に、姉さんが呆れ氣味に突っ込む。

「いや、そう言つておけば、今度シズネがそう言つたときにカズマが想像するじやん」

するとヒロコさんは、愉しそうにそう言い放つた。

「…………」

ヒロコさんのセクハラ発言はいつものことなので、僕は反応せずスルーすることにした。

「カズマもそこで顔を赤くしない！」

……スルー出来ていなかつた。

「どうか姉さん、指摘しないで。スルーしたいんだから。

「あ、シズネちゃん。ここにちは」

とか思つてゐると、今度は僕の背後に向かつて挨拶した。

振り返ると、そこには清楚で可憐なお嬢様という感じの少女、同じクラスのシズネがいた。

「ここにちは。あれ、カズマさん、顔が赤いですよ? 具合でも悪いんですか?」

「な、なんでもないよ!」

僕の顔を見て不思議に思つたのか、シズネは訊ねてくる。言つてるそばからシズネが現れて動搖したのか、どう考へても怪しい返事をしてしまつた。

「そうですか……キヨウさんとメイさんはまだなんですか?」

しかし相手はやつぱりシズネだつた。

僕の怪しそうな対応を気にする様子も無く、すぐに自分に興味のある話題を持ち出している。

たまにこの岡太さとこいつがマイペースをが羨ましくなるのは内緒だ。

「んー、何も訊いてないし、そもそも来るんじやない?」

その問いに、姉さんがやや投げやりに答えた。

「んー、でもちょっと遅すぎない? キヨウさんたち、何かあったんじや」

気になつたので訊ねた、その後。

「呼んだか? カズマ」

「カズマ、邪魔。そこどいて!」

それに答えるように、背後から一つの声が聽こえた。

一つはだるそうだがどこか温かみのある、男らしい低い声。

もう一つはハキハキしていて良く通る、女の子の声だ。

振り返ると、ドアのすぐ前に見慣れてきた一人の先輩が立つてい

た。

一方は守口響<sup>モリグキヨウ</sup>。僕より一つ上、一年生の先輩だ。

身長はぱっと見で180cmくらいと僕より高いのだが、体つきは中肉中背な体格の僕と同等くらいかそれ以上に細い。

しかしお毎の放送中20分間、ずっとBGM担当としてギターを搔き鳴らしていることを考へると、瘦せているのではなくて、余分な肉がつきにくい体质なのだろう。

顔つきも細めで、美形といえるくらいに整っている。

だが目が隠れるほどに長い前髪どこか気だるそうな表情で、初見だと近寄りがたいくらいに怖い雰囲気がある。

その物憂げな表情などで女生徒に人気らしいのだが、彼女がいるという話は聞いたことがない。

そしてもう一人、は守口鳴<sup>メイ</sup>。

キヨウさんの双子の妹らしく、顔つきもキヨウさんを少し丸くしたような感じになつていて。

キヨウさんに比べると少し幼い感じがするが、それがむしろ女子としての可愛らしさを引き立てていて、可愛いとも綺麗ともいえる顔立ちになつていた。

身長は姉さんより拳二つ分くらい高くて、髪は後ろをピンクのリボンで縛つてポニーtailにしてある。

リボンは姉さんと違つてそれが標準なのか、今までに違つリボンをしているのを見たことがない。

また体つきは森口家の遺伝なのか、キヨウさん同様にかなり細い。スリーサイズはぶつちやけ幼児体型な姉さんと互角だ。

……遠回しに表現したら、かえつてわかりにくくなつた気がする。というわけでストレートに言い直そつ。

かなりの貧乳だ。

ほん、きゅ、ほん、って表現に倣つて表すなりきゅ、きゅ、きゅ、つて感じ。

顔つきもちよつと凜々しいところがあるので、ボーイッシュな格好をしたら性別を間違えられるかもしねな……

「カズマ。今何か、失礼なこと考えてない？」

「い、いえ！ 何も！」

そんなことを考えていると、メイさんに睨まれた。

鋭い……。

「まあまあ。みんなそろつたんだし、始めようよ」

そんなメイさんの視線に気付いたのか、姉さんが全員に向けて言い放つた。

メイさんは渋々といった感じだが、それに従い、はい、と簡潔に返事をしてから持ち場に移動する。それに連なって、他のメンバーもわかりましたのはーーいだのおひよ、だのと各自が返事をして持ち場に移動していた。

僕と姉さんはマイクのある席。

その少し後ろにBGM担当のキョウさんがアコースティックギターを構えて、その辺のイスを引っ張り出してきて座る。

その隣に同じくイスを引っ張り出してきてメイさんが座り、ヒロコさんとシズネは少し離れたところで打ち合せを始めた。

「よし、準備はできたね。始めるよ！」

言いながら、姉さんはマイクの横にある「O N A.Y」 と書かれたボタンを押す。

さあ、お昼の放送スタートだ。

「やつほーみんな、元氣ー？ 放送部の部長、マドカでーす！」

姉さんがハイテンションに、マイクに向かって話しかける。

それと同時に、キョウさんがなんだか楽しそうな、三拍子の曲を奏でていた。

他の高校はどうなってるのか知らないが、僕らの『お昼の放送』はどこかラジオじみた雰囲気のものだ。

「部員のカズマです。今日は生徒会からの云々はないので、早速最初のコーナーに入りたいと思います」

そう言いながら、姉さんに田で合図する。

「おれの話を聞けえ！ 略して！ オレハナの『コーナー！』

僕の合図を見た姉さんは、舌つ足らずでりながらもハイテンションな声でタイトルコールをした。

でもその声で『おれ』って言つのはなんていうか微笑ましそうると思う。

「イヒーイー！」

そんなことを考えながら、僕も乗る。

「はい、皆さんからの投稿を読み、それについて語つたり、突つ込んだり、そのまま終わつたりするオレハナの『コーナー』です」

そしてすかさず落ち着いた雰囲気を作り、『オレハナコーナー』の趣旨を解説した。

放送部の部室前には手紙を入れる穴が開いた木箱、通称田安箱が設置されている。

さらに僕らの放送は学園でも人気らしくて、毎回結構な数の手紙が来るのだ。

だから今では、放送時のコンテンツは全てその手紙を使ったものになつていた。

ちなみに『コーナー』は三つあり、兄弟姉妹ごとに一つを担当している。

そして僕と姉さんの担当がこの『オレハナコーナー』なのだ。

「じゃあカズマ、最初のお便り読むね。ペンネーム『かつて佐藤と呼ばれた鈴木』さん……ペンネームから突つ込むべき？」

なんというかアレなペンネームに、姉さんが意見を求めてきた。  
「触れないでおいてあげようよ、きっと複雑な家庭事情があるんだ

よ

各『コーナー』の時間は5分。

変に脱線すると時間が足りなくなるため、スルーさせるするつもりで僕は言つ。

しかし姉さんはそれに感心したらしく、どこか寂しそうに「そだ

ね」と呴いてから再び手紙の朗読を再開した。

「ごめん姉さん、そこで本当に複雑な家庭事情を想像しないであげて。

「『放送部の監さん、こんなにちはば。最近、家で飼つてゐるニアーアキヤットのタマが可愛くてしかたありません』あは、にやんこは『冒頭を読み終えてから、姉さんが嬉しそうに感想を漏らした。ウチにもファンタジングといつも前のトラネコがいるので、ネコの話題は親近感が沸くらしい……』ってちよつと待て。

「姉さん、ニアーアキヤットはネコじゃない」

「え？ みーあ、つて鳴くにゃんこじやないの？」

心底不思議そうに姉さんはそう言つた。

ちなみにこのバカ姉は本気でこの言葉を吐いている。

「違うー！ニアーアキヤットはマンガース科だよー！」

「カズマ、詳しいな」

ギターを演奏しながら、感心したようにキョウウさんが呴く。

「む」

その直後に何故か、メイちゃんに睨まれた。なんで？

「まあいいか。えつと」

困惑する僕を放つたらかしにすると強引に話を戻し、姉さんは続きを読む始めた。

お便りの内容を要約すると、ゲームをしていたり、本を読んでいたりするとニアーアキヤットが遊んで欲しそうにじやれてくる、というものだった。

「あー、これはわかる。可愛いよね」

そして読み終えてすぐに、姉さんが嬉しそうに感想を漏らした。隣を見ると、とてもいい笑顔をしている。

思い出してみれば、姉さんも家では同じような感じだった。

「ファンタジングも、姉さんがリビングでごろごろしながらテレビ見てたらじやれついてくるもんね。昨日も確か、うつ伏せに寝てる姉さんの背中に乗つっていたつけ」

「ちょっとカズマ、余計なところまで言わなくていいのー。」

僕の言い草にどこか恥ずかしい点があつたのか、姉さんは一転して赤い顔でそう言った。

あ、これは掘り下げるに放送中に姉弟喧嘩をするにしなつそうだ。

というわけで。

「思つたより長かったし、今日のオレハナのコーナーはここまでかな」

「カーズマー！」

ソーバーいう時は、やううと話を流すに限る。

「ほひ姉さん、次のコーナー入るよ」

そう言いながら、シズネとヒロコさんに田で合図すると、それにいち早く気付いたヒロコさんが姉さんを押しのけてマイクに向かった。

「よーし、じゃあ次は！ ヒロコとシズネの一 お悩み相談、略してナヤソーのコーナー！」

そして手早く、自分たちが担当するコーナーのタイトル「ホールをする。

それにあわせて、僕と姉さんはマイクから離れた位置にある、待機中のメンバー用の席へと向かった。

「く……カズマ、ヒロコ……覚えてなさいよ……」

姉さんが何か言つていたが、今は気にしないことにした。

「匿名お悩み相談のコーナーは、文字通り匿名で寄せられたお悩みに、私たち桜ノ宮姉妹が答える「コーナーです」

シズネの解説を、ヒロコさんが引き継ぐ。

「ちなみに略称がオナソーでなくてナヤソーなのは、オナソーだとなんか工口いたツ！？」

昼食時に相応しくない発言をしようとしたヒロコさんと、姉さんが後ろから高速で水平チョップを叩き込んで黙らせる。

ブンツ、と風を切る音がし、ヒロコさんの……早すぎてよく見え

なかつたが、多分後頭部を直撃したんだと思つ。

「失礼しました。じゃあシズネちゃん、続きをお願ひね」

そして妙に良い笑顔でシズネにそう告げて、再び待機メンバー用の後ろの席へと下がつた。

……どうやら、さつきの仕返しも兼ねていたようだ。

「あ、はい。えっと、では最初のお便りを」

そしてシズネはシズネで特に気にする」とも無く、淡々とコーナーを進めていた。

なんだかんだでシズネは大物だと思つ。

「あ、アタシが読むよ」

と思つたら、あつむひローハンは復活して横から手紙を奪い取り、読み始めた。

タフだなあ……。

「えーっと、ペンネーム『恋する乙女』さん。おお、恋愛相談だ」

その手の話題が好きなのか、ヒロハさんが声が弾んでいる。

「『放送部の姫さん、こんにちは』『こんにちは』

「こんにちは」

ヒロハさんが挨拶を返すのに合わせて、シズネも挨拶をする。

「『最近、好きな人が出来ました』　いいねえいいねえ。青春だねえ」

ヒロハさん、なんていうか反応が女子高生じゃないです。

「『でも、その人には彼氏がいるみたいですね。どうしたらいいのでしょうか』……か。うん」

一度沈黙するヒロハさん。

ちよつと考へていらし。

「……ごめん、ちょっともう一回読む時間をください」

普段は姉御肌で言動も男らしげヒロハさんが、急に丁寧な喋り方でそう言つた。

そして言うが早いが、黙つて真剣な表情で手紙を読み直している。良くなみると、冷や汗をかいている。

……僕も今のうちにちょっと今の内容を整理しようと思つ。

えつと、投稿者が『恋する乙女』さん。ペンネームから察するに

女性だろ？。

そして悩みは。

好きな人が、彼氏がいるような人である、といつこと。

彼氏……好きな人に、彼氏が、か……。

「…………」誰かフォローできる人はいないか、と思いながら全員の顔を見回す。

ヒロコさんは珍しく、難しそうな顔をしている。

仕方ないよね。僕も正直、なんて答えればいいのかわからない。ヒロコさん同様にナヤソーコーナーの担当、シズネでもさすがにこれは困つてゐるに違いない……そう思つて彼女に視線を移す。すると、なんとシズネはなぜヒロコさんがそうしているのかが分かつていないので、きょとんとしていた。

相変わらずの大物だが、フォローする気も無さそうだ。キヨウさんのギターも、さつきから曲が安定しておらず、じりじりと変わっていた。

BGMの曲調を決めかねているようだ。

メイさんはペットボトルの水を飲んでいる。姉さんはさつきの手紙で恋しくなつたのか、携帯でファンシングの写真を見て微笑んでいた。

って、メイさんと姉さんは聞いてすらいない！？

なんていうか清々しいくらいに……ヒロコさんに助け舟を出せる人がいないことが確定した。

仕方ない。ここはヒロコさんの底力に期待しそう。

「…………えーっと」

少しの沈黙の後、ヒロコさんが口を開く。  
どうするんだろう。

ヒロコさんの判断は

「好きなら奪い取っちゃえればいいと思つよ、うん。以上！ シズネ、次！」

強引に流した！

僕も人のことを言えないけど、うちの部は『強引に流す』という手段を愛用する人が多すぎだと思つ。

「はい、じゃあ次の o便りは……」

そしてシズネもそれにあつさり応える。

なんていうか、豪胆な姉妹だった。

「はい、じゃあ今日のナヤソーノーナーはここまで！ みんなもなにか悩みがあつたら、一人で悩まずアタシらに相談しろよ！」

もう一つの手紙に答えてから、ヒロコさんはそう締めくくつた。

これで桜ノ宮姉妹担当のコーナーも終了だ。

桜ノ宮姉妹は後ろの席へ移動し、守口兄妹ことキョウウさんとメイさんの二人がマイクに近づく。

「キョウウと

「メイの！」

「うるおぼ演奏！」

それから一人でタイトルコール。

盛り上げる前提のため、キョウウさんは適当にギターをかき鳴らしていった。

「というわけで、うるおぼ演奏のコーナーです。このコーナーは、皆さんのリクエストした曲を俺のギターとメイのボーカルで再現する、そんなコーナーです」

まずキョウウさんがコーナーの解説をする。

「本日は、ペンネーム『水木カナ大好き』さんのリクエスト、水木カナさんの『Hug and Love!』です」

その後すぐ、メイさんが今日のリクエスト曲を発表した。

水木カナは最近流行りの女性アイドルだ。

また『Hug and Love!』は恋する少女のまっすぐな気持ちを歌つた歌で、テンポが良くて歌詞も可愛らしく、聴いていて楽しい。

「いくぞ、メイ」

ギターを構えたキョウウさんが、メイさんに会図。

「ん。ワン、ツー」

それを受け、リズムをあわせるためのカウントをメイさんが始めて。

「「ワン、ツー、スリー、ハツ！」」

それに合わせてキョウウさんの声が重なり、キョウウさんのギターによる前奏から曲が始まる。

そして水木カナの曲は全体的に前奏が短いので、すぐに歌に入る。「今すぐ君を抱きしめたい」

メイさんは年齢相応の無垢な可愛らしさと、女性らしい綺麗な高音を絶妙に合わせ持つた、いい声をしている。

姉さんも『可愛い声』をしてはいるのだが、どちらかといえば子ども特有の微笑ましさ、といった方がしっくりくるのだ。

「hug and love! 飛び込むからね」

また、『つるおぼ演奏』と言つてるわりには一人ともちやんと練習してきていたりする。かなり巧い。

完璧に原曲を再現できているわけではないのだが、どちらかがミスをしたときにもう片方が巧く合わせて、まるでそういうアレンジだ、とでもいうようにじこまかして、平然と続けているのだ。

というか、僕自身も放送部に入つてしまははその『じこまかし』に気付いていなかつた。

最近になつてから、原曲からアレンジされてはいると思つた時のメイさんの照れ笑いや、キョウウさんのちょっとすまなそつな表情を見て勘付。

さらに姉さんが『あ、またじこまかしてる』と隣で茶化すように笑いたので確信できた、というのが正直なところだ。

「愛してあげるー！」

メイさんが最後のフレーズを叫ぶ。

そしてその興奮が冷めないままキヨウさんがノリノリで後奏を弾き切つて、演奏は終わった。

やつぱりこの一人は巧い。

「「水木カナの、『Hug and Love!』でした！　ありがとうございました！」

そして締めの挨拶を終始息ぴったりに決めて、今日のうれしきおぼ演奏のコーナーも終了である。

そして担当コーナーが終わると、キヨウさんはマイクから離れてBGM担当に戻り、メイさんはその隣に移動した。

「さて、本日もそろそろ、お別れの時間がやつてまいりました」

そして部長として締めの挨拶をするべく、姉さんが再びマイクに向かった。

キヨウさんもそれに合わせて、落ち着いた雰囲気の曲を奏でている。

ちなみに締めの挨拶は姉さんのみの担当なので、僕は下がつたままである。

「担当はいつもどおり放送部全員、門真円、一馬、桜ノ宮広子、静音、守口響、鳴の六人でお送りしました」

いつも真剣に締めの挨拶をしている姉さんを見ると、改めて姉さんが部長であることを再確認せられる。

普段は子どもっぽくてわがままで、バカな言動も多いけど。

それでもやつぱり、僕の姉で、先輩なんだなって思う。

だから僕は、姉さんが真面目に締めの挨拶をするこの瞬間がどこか好きだった。

「というわけやで」

……感心してるとこに躊躇ないでよ。

「ほん……というわけで。今日の放送はここまでー。次の放送をお楽しみにー。ありがとうございました！」

やして歯んだじとしゃべりかねつとしてこらのか、少し早口で締めくくる。

やつぱは駄田だ、この姉。

……まあ、とつあえず。

本日の放送も、なんとか無事に終わったのであった。

続く。

第02話：5月上旬、火曜日2（後書き）

2話は以上になります。  
楽しんでいただけたでしょうか？

第03話・5月下旬、水曜日（前書き）

\* 2011年12月26日に推敲、加筆修正を行いました。

## 第03話・5月下旬、水曜日

水曜日、放課後。

僕、門真一馬カドマ カズマは放送室の隣、放送準備室にいた。

放送準備室は放送部の部室だ。

元々は文字通り、放送時に使う小道具を置いておくところだつた  
り、放送する人が発声練習するための場所だったらしいのだが、姉  
さんが一年生だった頃に放送部が占拠したとか不穏なエピソードを  
聞かされている。

しかしその後何も無く今に至っているため、特に問題はない……  
のだと思いたい。

信じることつて大事だよね。

室内にはいつも通り、放送部のメンバー全員が集まっているし。  
「よーし、じゃあ定例部会、始めるよー」

そう言つたのは、見た目は子ども、中身も子どもな僕の姉さん。  
服装次第では小学生と間違えられても不思議じゃない小柄さだが  
これでも放送部の部長で、自慢のツインテールを今日は水色の玉が  
ついた髪留めで止めていた。

ちなみに名前は門真円カドママダカだ。

「じゃあとりあえず、田安箱開けるよ」

姉さんの開始の合図に答えて、姉さんの隣で木製の箱についてい  
た南京錠を外したのは桜ノ宮広子サクラヒロコさんだ。

姉さんと同じ3年生で副部長、色っぽいお姉さんという表現がし  
っくりくる人で、発言の傾向から歩くセクハラ親父の異名を持つ…  
…僕が勝手に心の中で呼んでいるだけだけど。

部屋には長机が三つ、「口」の字型に置かれていて、姉さんとヒ  
ロコさんは縦線に当たる位置に座っていた。

なんでもそこが3年生の固定席らしい。

ちょうど中心に近い位置なので、納得といえば納得かもしない。そんなことを考えていると、ヒロヒロさんが荒っぽい仕草で目安箱をひっくり返した。

中から50通くらいの手紙が落ちてくる。

もちろん、お昼の放送中のコーナー用のお手紙だ。

「今日はいつもより多いですね」

僕のちょうど対面にいる、細身でちょっと冷たそうな感じの2年生、守口響モリグキヨウさんが手紙を見て呟くように言う。

声のトーンが独り言つぽかつたので、返事をするかちょっと迷う。

「そうだね、キョウ」

その間に、代わりにキョウさんの隣にいたポーテールの少女が。どこか甘えるような声と仕草で反応した。

キョウさんの双子の妹、2年生の守口鳴モリグチメイさんだ。

そう言い終えた後、メイさんが一瞬僕を睨んだ……ような気がした。

メイさんは人見知りする性質なのか、あるいは嫌われているのか、僕に対して何だか冷たい。

「じゃあいつも通り、分ける作業から始めましょうか」

それを敏感に感じ取つた……わけではないだろう。

ほぼ確実に单なる偶然で、僕の隣に座つていた少女が口を開いてメイさんの険悪そうな雰囲気を弾き飛ばす。

綺麗で長い黒髪が特徴的な眼鏡っ子、上品で朗らかな雰囲気を持つ桜ノ宮静音サクラミツネだ。

シズネは言いながら、既にいくつかの手紙に手を伸ばしていた。手紙は各コーナーごとに形式が違つて別々に書くようになつていいため、コーナー別で分ける必要があるのだ。

目安箱の前には投稿用の用紙が置いてあり、四つ折にするどこのコーナー宛かを書く欄のみが見えるようになるという優れものだつたりする……のだが、その機能に気付いていないのか変な折り方をして入れる人が多いため、結局は開いてみないと宛先がわからない

とこうやや残念なことになつていいのだった。

まあ元々、50通前後を6人がかり。たいした手間でもないのだが。

実際、分け切るまで5分もかかっていない。

「うーん、私ら宛が14通でヒロコら宛が16通、でメイちゃんら宛が24通か。やっぱ人気だね、うろおぼ演奏」

そして仕分けた手紙を見て、姉さんが感想を漏らす。

「まあメイちゃんら巧いしね。とりあえず、手紙は各自よつだい持帰りでいいね？」

そのつぶやきに、ヒロコさんがフォローなのかよくわからないフオローをしつつ、質問を返す。

「あ、うん、かまわないよ。じゃ後は各自よつだい毎に、つてことで」

姉さんの声に、全員が返事をする。

僕ら放送部はちょうど家族別で三つに分けたりも出来るため、こういったことが出来るのだ。

「どうか、今年はそれ前提で担当コーナーが決まつたらしい。さて、じゃ本題に入ろつか」

全員が手紙を仕舞つたのを確認してから、姉さんが再び言った。

そう、僕ら放送部の活動は、毎週火曜と木曜にやつているお昼の放送だけではないのだ。

姉さん曰く、僕らの通つている阿鳥学園ことアート学はイベントが多い。

特に文化祭が顕著で、なんと7月中旬と2月上旬の2回もあるのだ。

そして僕ら放送部はその2回の文化祭で、前編と後編に分けて1回ずつ放送劇をやるのが伝統になつていて。

しかも、脚本までも部員たちで考えるところまでが伝統なのだ。

「ま、今年はまだ何も決まってないんだけどね」

しつと姉さんが言い放つた。

おい。

「大丈夫なの？ ヒロコさん、去年はこの時期、どの辺りまで決まってたんですか？」

不安になつたので、僕はとりあえず姉さんと同じ三年生に訊ねる。  
「そだな、去年は……マリナさんがテーマだけ決めてて、あらすじをみんなで考えて……コンセプトが決まつたのが6月の頭くらいだつたかな。だからこの時期だと、テーマくらいは決まつてたと思う。あ、マリナさんってのは去年の部長ね」

「あー、マリナさん懐かしいな」

姉さんが反応した。

けつこう嬉しそうだ。

姉さんのみが高校にいた頃の話は結構右から左だったため、あまり覚えていない。

「そうですね。結構綺麗な方でしたし……って痛いな、何だよメイと同じくキヨウさんも懐かしがるが、なぜかメイさんに足を踏まれていた。

「ふん、だ」

本人はそっぽを向いている。

「なんなんだよ……」

よくわからない、といった感じで不満そうにつぶやく。

もしかしてメイさん、『マリナさん』が嫌いだつたんだろうか。  
「まあ去年はそんな感じでマリナさんが一人で決めてたんだけど。今年はみんなであらすじ考えて、アタシが脚本書こうと思ってる。というわけで大雑把でもいいから決めていこうか。マドカ、何かある？」

守口兄妹が険悪になるのを避けるためか、すぐにヒロコさんが話題を振つた。

「んー、童話のたぐいのアレンジ、とかの方がわかりやすいと思つんだけど。去年もそうだったしね」

姉さんが答える。

「ああ……そうだね、去年はシンチレラだったし。じゃ今年はラブンツヒル?」

「どう派生したらどうなるのよ……却下。もひつひつと有名な作品の方がいいと思つ」

ヒロコさんの第一案はあつさり姉さんに却下される。  
つかラブンツヒルってどんな話だつけて……。

「じゃあ白雪姫とかどうですか」

それを聞いて、キヨウさんが意見を出す。

「やるとしたら魔女役はヒロコだよね」

姉さんがやり、と意地悪そうな笑みを浮かべて感想を言った。  
「えー、だつたらアタシよりむしろメイちゃんの方が……『めん』  
それにヒロコさんが反論するが、メイさんに睨まれて黙つた。  
……ヒロコさんすら黙らせる、メイさんの眼力半端じやねえ。

「おやゆび姫やつよ。もちろん主役は姉さんで」

便乗して僕も意見を出す。

「カーブーマー……何が言いたいの」

姉さんに睨まれた。

でも気にしない。

「おやゆび姫つてどんな話でしたつけ」

「どうやら知らないらしく、シズネが訊ねてくる。

「んー、そういう私もちゃんとおぼえてないなあ。主人公がちつ  
ちゃいつてのはわかるけど……つて、誰がちびだゴルア！」

姉さんが一人で騒いでいた。いつでも楽しそうにしているなあ。  
そんなことを考えながら、僕は答える。

「んー、大雑把にいうとチューリップから生まれた女の子が、いろ  
んな動物に誘拐されるんだけど、最後は花の王子さまと幸せに暮ら  
す、つて話」

「ホントに大雑把ね……つてかそれも結構マイナーじゃない?」

僕が説明を終えると、メイさんが口を挟んだ。

「ねえお姉ちゃん。配役つて私たちだけだつける?」

そしてあらすじの感想もメイさんの意見もスルーしてシズネが口を開く。

「前言わなかつたつ……アタシらのみでやるのが最善だけ、去年は脚本的に人数が足りなかつたから、演劇部に協力してもらつたよ」

それにヒロコさんが答えた。

「確かに去年の部長が演劇部の部長と仲良かつたんでしたつけ」

「その通り。よく知つてたね、カズマ」

「姉さんに聞かされた氣がするので」

とりあえず誇らしげに答える僕。

しかし実際は、それ以上詳しく述べ知らなかつたりする。というか覚えていない。

「なるほど」

「ヒロコさんとは話さなかつたんですか？」

なんとなく気になつて訊ねてみる。

「どうか、桜ノ宮姉妹の日常会話が気になつっていた。

品の良さで言えば対極というか両極な2人だし。

「ああ、まあシズネは雑談として話すとすぐ忘れるから」

「えー、そんなことないよお姉ちゃん」

ヒロコさんの発言に、シズネが抗議する。

「じゃあ昨日の晩御飯、覚えてる？」

「もちろん……」

ヒロコさんが試すように、シズネに質問する。

シズネは少し考える素振りをしてから、20秒ほど考え込んだ後。

「えーっと、何の話だっけ」

笑顔でそんな答えを出していた。

なんていうか色々大丈夫か、シズネ……。

## 結局。

次の定例部会、つまり来週の月曜までに、各自で元にしたい話を探してくる、とだけ決めて今日は解散になつた。

「よしカズマ、本屋よつて帰ろうか」

「そだね。姉さんは絵本を探すんだよね」

「だーかーらー、あんたは姉さんに対して何が言いたいわけ？」

おちよぐるよつに言つと、姉さんが怒りのオーラを発しながら僕を見む。

「お、さすが門真姉弟。熱心だねえ。アタシらはどつする？」

そんな僕らのやり取りを聞いて、ヒロコさんはシズネに訊ねる。  
「今日はいいんじやないかなあ。わたしは明後日に集めてる小説の新刊であるから、そのときに探すつもりなんだけ」

「あー、そういうアタシも明後日に集めてるやつ出るわ。そだなあ、今日はまつすぐ帰ろつか」

「うん。じゃあ眞さん、また明日です」

「おつかれー」

そう言い残してから、桜ノ宮姉妹は去つていった。

……ヒロコさんとシズネで、『集めている小説』ときいて連想されるジャンルが違うのはなぜなんだろう。

「おつかれー。えつと、守口兄妹はどうするー？」

付いてくる？ ところがアンスをこめて姉さんは尋ねていた。

「そうですね……」

キョウさんはそう呟きながら、考えるように腕を組もうとした。

「いえ、メイたちは帰つて明日の曲練習します」

しかしその腕は組みきる前にメイさんに絡み付かれ、片方だけが所在無げに浮くことになつてしまつた。

明日の曲、とはつるおば演奏用の曲のことだね。

「メイ、別にそこまで急ぐ必要はないんじやないか？」

自分が考えている間にさつさと答えを出されてしまったのが不服なのが、キョウさんはメイさんと言つ。

「う……だ、だつてまだ曲決まってないじゃん」

「いつもどおり、既に知ってる曲から選ぶんだしそんな時間いらな

いだろ?」

「いるよ、えーと……ほら、長い曲とかあつたりするし

「そんな長いの、逆に使えないだる」

「ああ、なんかケンカが始まっちゃった。

「ほーら、2人ともそこまで。まつたくもう、しょうがないなあ」

姉さんが仲裁するため、2人の間に割つて入る。

大人っぽいヒロコさんがやつたら貫禄あつたんだろうけど、姉さんがやると背伸びしているよううでやつぱりどこか微笑ましい。

「部長、じゃまです」

しかもあつせつとメイさんに押しのけられている。

「うにゅ

……いつも思つけど、姉さんってあんまり部長としての威厳ないよなあ。

なんで部長やつてるんだろう。

「しようがない。行こう、姉さん」

やむをえず、2人をおいて先に行く。

「むー……2人とも、戸締りお願いね」

不満そうに姉さんもそう言い残し、僕に続く。

部室の鍵は職員室においてあるものと部長である姉さんが持つているものの計2つだ。

そして今日は最初に来ていた守口兄妹が職員室から持つてきた鍵があるので、姉さんが先に帰つても施錠は行える。

というかぶつちやけ、部室内に盗られて困るものというのほどないため、施錠自体気分の問題だつたりもするのだが。

そして、学校から歩いて5分、家からなら歩いて10分程度の位置に、本屋は存在する。

店の名前は……正直覚えていない。

学校周辺どころか家の近くに、本屋はここしかないからだ。

そのため、僕や姉さんみたいにこの辺に住んでいる人間にとつては本屋＝ここ、という認識が既に出来上がっている。

というか本屋、で通じるので、正式な店名を覚える必要性がまったく無いのだ。

またもう少し正確に言つと、本屋自体は学校付近のショッピングモールの中にある。

横幅は2店舗分のスペース、さらにこのショッピングモールで唯一の3階建でと、ショッピングモール内でも断トツの広さだ。品揃えも相応に整つており、他の本屋を探す必要が無いことも本屋＝ここ、という認識を強めていた。

「私は1階で探すけど。カズマはどうする？」

「僕は上から見て回るよ」

姉さんは放送劇の原題を探すのに専念するようだ。

僕はいつもどおり、マイペースに見て回る気満々である。自分で言つのもなんだが、僕はけつこう読書家だ。

読む本自体は特にこだわりはないのだが、とにかくカバンに何冊か入つてないと落ち着かない、そんな性質である。

それを姉さんに言つたら、「どこの中字中毒者よ」と呆れられたけど。

まあ、そういうわけで。

当然、ここにもしよう来ているため、ここを効率良く回るための道順みたいなのは既に自分の中で決まっていた。

具体的には最初に最上階へ行き、上から順番に見ていくのが僕のスタイルだ。

3階は料理本やビジネス向けのものといった、実用書のたぐいが多い。

また成人向けの雑誌等も置かれており、色んな意味で大人向けのコーナーになつていてる。

成人向けの本はそろそろ隠す場所がなくなってきたからスルーして、実用書の新刊を中心に、タイトル等から面白そうなのを探した。とりあえず『これで終わり……では終わらない』というハードカバーの本が気になったので、手に取つてみる。

ビニールでぴっちりと封をされており、立ち読みが出来なかつた。しかも値段は2000円と地味に高い。

なんだか気になる。

気になるのだが……見なかつたことにした。

やつぱり普通の高校生である僕にとっては、2000円は大金だしね。

次に手に取つたのは『人の心をつかむ人身掌握術21』という文庫本だ。

普通に立ち読みできる状態だったので、パラパラと最初の方だけ読んでみる。

似たようなのを前に読んだ気がする。

今日は真新しいものを探したい気分だったので、深く読まずに本棚に戻した。

そんな感じで30分ほど見回つていたが、姉さんを待たせているかもしないことを思い出して2階に降りる。

2階は漫画やラノベといった、若い世代向けの本が多い。

集めているラノベや漫画の新刊はまだ出ていないし、あんまり長居しても姉さんが怒るだけなので素直に1階に降ることにした。

1階は週刊誌や月刊誌、子供向けの絵本や参考書、文房具が置いてある。

階段を降りながら、既に1冊の絵本を熱心そうに読んでいる姉さんを見つけていたのでそのまま駆け寄つた。

見ているのはきっと、原題用の作品だろう。

集中しているのか僕に気付いていないみたいなので、そのままそつと観察する。

読んでいた本は……『クトゥルフ神話』だった。

「何をやる気なんだよー。」

「ひやあ！？」

黙つて見守るつもりだったが、思わず突っ込んでしまった。

姉さんは驚いたようで、一瞬本を落としかけていたが、ぎりぎりのところでキヤッチしている。

なんだかんだで反射神経の良い姉である。

「もう、カズマあ！ いきなり声かけたらびっくりするでしょー。」

「ごめんって。でも姉さん、さすがにクトウルフ神話は無理じゃないかな」

謝りつつ黙目押し。

クトウルフって人ですらないし。

そもそも演じれるものなんだろうか……。

「私も流石にこれをやろうっていう気はないよ。ただちょっと、最近見たアニメでチラッと出てたから気になつて」

僕の指摘に、呆れたような照れたような仕草で姉さんは答える。顔を少し赤くして、もじもじしながら恥らう様は少し可愛いく思つた。

でも発言が内容が残念すぎる上に、なんだかんだ言つても血の繫がつた実の姉である。

あまり気にせず、僕はさつさと本題を訊ねることにした。

「それで、姉さんの候補は決まったの？」

「まあ一応ね。これとかどうかな」

そう言って姉さんが掲げたのは、『アーサー王物語』だった。

「……けつこう長くない？」

放送劇は前編後編あわせて2時間程度だ。

アーサー王物語を2時間でやるのは、少々無理があるのでないだろうか。

「愛があればいけるよー。」

目を輝かせていう姉さん。

多分これを挙げてるのもアニメの影響なんだろ？

「却下」

「えー……面白いのに。じゃあこれは?」

次に取り出したのは……

「都市……伝説?」

最近の都市伝説について そんなタイトルの本だつた。  
「うん、色んなのが載つてあるし、どれか掘り下げたら面白いんじ  
やないかなって」

姉さんにしてはまともな案だ。

都市伝説はメジャーなものからマイナーなものまで色々ある。  
巧くやればいい作品ができそうな気がした。

「なるほど……いいね。僕も手伝うよ」

「うん、お願い。じゃあ、けょっと買つてくれるね」

「わかった、外で待つてる」

僕の返事に頷き、姉さんは本を両手で抱えてレジへと向つのだつ  
た。

……実は僕個人で候補を探すの、声を掛けるまで忘れていたので  
助かつたというのは内緒である。  
便乗できてよかったです。

続ぐ。

## 第04話・5月下旬、水曜日～木曜日（前書き）

マドカが買った本の内容は？

そしてキョウとメイの日常が垣間見れる第4話。

お楽しみください。

\* 2011年12月26日に推敲、加筆修正を行いました。

## 第04話・5円下旬、水曜日～木曜日

姉さんが本屋で都市伝説に関する本を見つけてきた日、夜。夕飯を終え、さりに風呂から上がって、ベッドに寝転がりながら本を読んでいると。

ドンドン、とこう荒っぽいノックの音が聴こえてきた。

「カズマ、いい？」

そして僕が返事をするより早く、ドアが開けられる。

年頃の男の子の部屋に、何の遠慮もなく立ち入ってくるのは……言つまでもなく僕の姉さんだ。

僕の後に入ったのだろう、姉さんは風呂上がりなのが一目でわかる上気した顔をして、さりにお氣に入りらしく三毛猫模様のパジャマに身を包んでいた。

しかもつりで飼っているトラネコ、ファングも一緒だ。

姉さんがドアを開けたときに、するりと僕の部屋に入ってきたのだ。

「ドアを開けるのは返事してからにしてよ……」

とりあえず文句は言つておく。

まあ正直、今夜姉さんが部屋に来ることとは予想していたので特に問題は無かったのだが。

……具体的に言つと、見られたらアレな本とかDVDはちゃんと隠してある。

「まあまあ。じゃ早速、付き合つて」

そんな僕の考えを推測するそぶりも見せずに、姉さんは嬉しそうに本屋で買っていた都市伝説の本を見せつけた。

同時にファングが「なー」と鳴く。

普通猫の鳴き声って文字で表したら「にゃー」になると思つたのが、うちのファングの鳴き声はどう聞いても「なー」だったりする。いや、別にどうでもいいことなんだけど。

「……」

「……」  
どうでもいいことに思考を巡らせつつ、僕は姉さんの誘いを快諾した。

「……」  
というか、元々そのつもりだったのだ。  
僕の答えで姉さんは機嫌を良くしたのか、嬉しそうに僕のベッドのふちに座ると、ぽんぽん、と自分が座つているすぐ横を叩いた。隣に座れ、という合図だ。

僕が動こうとすると、先にファングがその合図に応えて、姉さんが指示した位置でじろんと丸くなつた。

姉さんはそれを見て少し微笑み、ファングをひょいと持ち上げて膝の上に乗せて、僕の方を見る。

早く来なさい、と目で訴えかけていた。

「はいはい」

膝の上で不満げになーなー鳴いているファングを無視しつつ、僕も姉さんに応える。

腰掛けたのを見計らつてから、姉さんが僕にもたれかかってきた。姉さんが小柄なだけあって重くはないが、ややうつとおしい。そろそろ暖かいを通り越して暑い季節になつてきたり。

しかし、昔この状態で姉さんを離そうとして軽く弾いたら、そのまま戻る、弾く 戻る、また弾く また戻ると無限ループになつたことがあるので、それ以来大人しく肩を貸すことにしている。

ベッドは壁際に置いてあるのだから、もたれたいなら奥に座ればいいのに……。

「ふふん」

僕に抵抗する気がないのを察したのか、姉さんは上機嫌なまま本を開いた。

本はB5サイズとあまり大きくないため、ある程度密着しないと読めない。

「…………」

しばらくの間、無言になつてページをめぐり続けた。

内容的には首なしライダーや人の缶詰といった、ホラー要素の強いものが多くつたように思う。

しかもわざわざ不気味なイラストが付いているせいで色々想像させられてしまい、結構怖かつた。

そしてなんとなく。

お互い最初から無言だったせいが、先に口を開いたら負け……と  
いう感じの雰囲気になつてしまつていて。

結局2人とも途中一言も喋らないまま、本を読み終えた。

「…………」

読み終わつても、姉さんはまだ口を開けないとする気配がない。  
僕はもういいかと思つて、姉さんに言葉を投げ掛けることにした。

「どうしたの？」

「いや、んー……えつと……」

とりあえず声をかけても、姉さんはなんと言つたらいいのかわからぬ、そんな感じの反応をする。

「どれかベースにしたい話はあつた？」

待つついても進展しなさそつだつたので、もう少し具体的に話題を振る。

「…………」

だが返答は無い。

改めて姉さんの顔を見ると……その顔色は、やや青ざめてるよう  
に見えた。

「…………もしかして。

「姉さん……もしかして、怖かつた？」

からかうつもりは無く、むしろ心配してそう訊ねたのだが。

「……怖くなんかないよ……そういうカズマだつて怖いんじゃない  
のー？」

キレられた。

このバカ姉……せつかく人が、親切で言つてあげてゐつてのにー！

「そんなわけないだろー。こんな子供も騙しで怖がるの、姉さんく  
らいだよ！」

「誰が子どもよー。」

そう言いながら、手元にあった僕の枕を投げつけてくる姉さん。

枕は僕の顔に当たり、一瞬目の前が真っ暗になる。

そして枕が落ち、再び視界が広がった頃には、部屋には姉さんの姿はなかった。

直前に聴こえた足音から察するに、自分の部屋に戻ったのだろう。

もういい、知るもんか。

そう思いながら、僕は部屋の電気を消し、不貞寝した。

朝。

日の光を感じて意識が戻る。

あのまま眠ってしまったため、両目が開きっぱなしになっていた  
ようだ。

太陽光が僕の顔面に直撃している。

眩しそぎる……このままでは寝られない。

寝ぼけた頭でそれだけ考えた僕は寝返りを打つ。  
すると、何か柔らかくて暖かいものに触れた。

目を閉じたまま、それが何かを探るために意識を集中する。  
そこにあつたのは、ふさふさした体毛に覆われた、柔らかい感触  
だった。

……どうやら知らない間に、ファングが僕のベッドにむぐりこん  
でいたらしい。

そういうえば昨日、姉さんが部屋から飛び出した時にはまだ部屋に  
いた気がする。

ということは、閉じ込めてしまっていたのかな……。

ぐだぐだと、寝起きのあまり回っていない頭で考えていると、「  
すう……」と寝息が聞こえてきた。

明らかに人のものだ。

まさかと思いながらも、僕は畠を開ける。  
畠の前に、姉さんの顔のアップがあった。

「うわあ！？」

慌てて飛び起き、勢いに任せて掛け布団を剥ぎ取る。

そこには、可愛らしい三毛猫模様のパジャマのまま、猫のように丸くなつて眠る姉さんの姿があった。

「もう……なに……？」

姉さんは、寝ぼけた声で返事をしていた。

「なに？ ジゃないよ！ なんでここで寝てるのさ…」

昨日の今日でカツとなつた僕は、迷わず姉さんを怒鳴りつけた。

「……」

姉さんは氣まずそうに、顔を赤らめてそっぽを向いた。

「……」

僕も黙つて、姉さんの返答を待つ。

しばしの沈黙の後、姉さんがとつた行動は……

「……あ、あれば人を怖がらせるための本なんだから！…これが自然な反応なのよ！…」

逆ギレだった。

しかし内心恥ずかしいのだろう、顔が真っ赤だ。

「あー、はいはい……」

それを見たら、なんだか怒るのもバカラしくなつて。

僕もそこから、あえて追求はせずに。

姉さんがまだ言い訳がましく何か言つていたが、それも適当に聞き流して。

いつものように、一人で学校へと向かうのだった。

それから。

昼休みの放送はいつも通り（お察しください）になした木曜日

の放課後。

担任がいつも通り帰りのＨＲを適当に終わらせて去つていったのとほぼ同時に、キヨウさんからメールが来た。

『今から一緒に、ゲーセンいかないか?』

キヨウさんはゲーセンに行くのが趣味らしく(やつてこるのはだいたい音ゲー)、最近はよく僕を誘ってくれる。

ケータイのカレンダーを確認。

今日、この後は特に用事もない。

……よし、前フルボッコにされた格ゲーの、リベンジマッチを挑むとしよう。

そんな想いを胸に秘めて、僕はすぐに『行きますー。』と返信した。すると。

「よし、じゃあ早速行こつか」

「うわあー!?

後ろから、いきなり声が聞こえてきた。

振り向くとそこには、機嫌良さそうに微笑んでいるキヨウさんの姿が。

「よう、カズマ。驚いたか?」

「驚きますよ……ってか何で返信とほぼ同時に声を掛けてくるんですか?」

とりあえずツッコんでおく。

「ああ、実は教室の影ですっと張つてたんだな。行くぜ」

言しながら、キヨウさんはどこかそわそわしている。

まるで、何かに追われているような……。

あ、もしかして。

「そういうえばキヨウさん……」

メイさんは一緒にないんですか? と訊ねようとした、その時。

「準備できたな? 行くぞ!」

僕の言葉はあっさりと遮られ……

「つて、うわあー?」

そのまま、強引にゲーセンへと連れて行かれたのだった。

学校から歩いてなら一〇分くらいのショッピングモールに、ゲーセンもある。

というか学校周辺のゲーセンもそこくらいしか無いため、僕ら阿鳥学園の生徒が『ゲーセン』と言つたら、だいたいここを指す（キヨウさん談）。

ちなみにこのゲーセン、お世辞にも都會とは言いがたい町の雰囲気と違つてかなりゲームの揃えがいい。

首都圏や都市部にしか置いてなさそうなネット通信前提の筐体も、当然のように置いてあるのだ。

「けつこつ空いてるみたいですね」

しかし、その割にはあんまり客は入っていなかつた。

「この時間は穴場なんだよ。HR終わつてすぐにダッシュで来たなら、な。混むのはこれからだ」

「なるほど……」

さすがはセンパイ、という感じだつた。

キヨウさんに連れてこられるまでゲーセンに通う習慣が無かつた僕には、そこら辺の勝手はさっぱりなのだ。

「じゃあキヨウさん、さつそく『ウエーマ』やつましょつ。この前のリベンジです」

「いいぜ。手加減はしないからな?」

僕がそう言つと、キヨウさんは勝氣な笑みを浮かべ返していた。

ウエーマ……正式名称『ウエポンマスターZ』は最近出たばかりの

対戦格闘ゲームである。

原作はラノベらしいのだが、微妙にリアなのか見つけられていない。

一回読んでみたいんだけどなあ……。

とまあ、それはさておき。

ゲームの特徴としては、開始時にキャラクターだけでなく、そのキャラクターが使う武器も選べるという点がまずは挙げられる。

プレイヤーキャラは6人と一般的な格闘ゲームにしては少なめなのだが、武器も6種類あって、キャラクター選択時にそれも別で選ぶ事になるため、使えるキャラクターのパターンは実質、 $6 \times 6$ で36通りある。

僕が愛用しているのは加奈かなというキャラクターで、能力としてはパワーは無いけど小柄でスピード、トリッキーな動きで相手を翻弄するタイプ。

それに6種類ある武器の中で最も攻撃力が高いバトルアックスを持たせたタイプが、僕の主力になつていてる。

対するキョウさんは、高いパワーとスピードで相手を叩きつぶす、本編の主人公、太一たいちを使ってくる。

キョウさんは原作を知つてているらしく、装備も原作に従つて双剣を選んでいる、とのことだった。

「さあ行くぜ、カズマ！」

「はい、キョウさん！」

キョウさんの合図で、僕とキョウさんの死闘が始まった。

先に仕掛けてきたのは、キョウさんだつた。

ダッシュで一気に接近、斬りかかつてくる。

僕は飛んでそれを回避、後ろに回り込んでバトルアックスで襲いかかつた。

しかしそれは読まれていたらしく、あっさり中段ガードで止められてしまう。

だが、こっちもそこまでは想定済みだつた。

すぐにしゃがんで、下段にロー・キックを叩きこむ。

加奈のスピードは全キャラ中でも最速だ。

だからこれは、読めていても、防ぐことが出来ない！

バシッ、というサウンドエフェクトと共に、相手にダメージが入つた！

……最大HPの5%くらい。

やっぱ加奈は、武器で攻撃しないとダメージが低いなあ……。  
そんなことを思つてゐる。

「そう来るのを、待つていた」

キヨウさんが、どこか嬉しそうにそつと笑く。

「しました……」

やばい そう思つた時には、もう遅い。

キヨウさんは双剣の特性を最大限に活かして、攻撃を仕掛けた。

双剣の特性。

それは一撃の威力の低さを引き換えにした、全6種類の武器の中でも最高クラスの……連続攻撃の速さに他ならない。  
ゼロ距離での、連続攻撃。

しかもキヨウさんが使つてゐる太一は、元々のパワーが高いため、  
双剣の攻撃力の無さは充分カバーできてしまうのだ。  
その連続攻撃だけで、一気にHPの4分の3くらいを持つていか  
れてしまつた。

やむを得ず、後ろに飛んで距離を取る。  
まずい。

これでかなり不利になつてしまつた。

でも……高いスピードによる回避性能の高さが、僕の持ちキャラ、  
加奈の魅力だ。

HPが0になるまでは……まだ、勝負は分からぬ。  
ここから逆転勝ちすることだって、きっと出来る！  
僕はそう信じて、ステイックを握り直すのだった。

そして。

「……まあ、そうだよね」

結局。

あの後は、一撃も与えることなくあっせりと負けてしまった。

そもそも序盤に4分の3も食らってしまった時点で、『回避性能の高さ』に信憑性なんてねーと畜生。

「まだまだだな、カズマ

嬉しそうに、キョウさんは勝ち誇った様子でそう言つた。

「つ、次こそは勝ちます……」

完敗してしまった僕に言えるのは、それだけだった。

「まあ、そうしょげるなつて。次ギタマやるから、ついてきてくれ

「あ、はい」

ギタマ……ギターマイスターは、キョウさんお気に入りの音ゲーである。

ギター型のコントローラーを使って、曲に合わせてボタンを押していく、いわゆるリズムゲーという奴だ。

いつも放送室で散々、アコースティックギターを搔き鳴らしているはずなのに……まだ鳴らし足りないんだろうか。

「わかりました」

そんなことを密かに想いつつ、僕は素直についでいった。

途中、JF0キャラが田に入る。

中身は猫を丸っこくデフォルメした感じのぬいぐるみだった。

あれ取つて帰つたら、姉さんが喜びそうだなあ……。

などと思つてみると、ブーン、という振動音がかすかに聴こえてくる。

ポケットに上から手を当てるが、僕のケータイが震えているわけではなくてどうだった。

となると……

「キョウさん、ケータイ鳴つません?」

厳密にはバイブレーションなので、『鳴つてこる』はおかしい気がするのだけど。

……日本語つて難しいなあ。

「ん? ああ、みたいだな

と言いながらも、キョウさんはポケットからケータイを取り出そうとする素振りすら見せなかつた。

「……良いんですか?」

念のため、聞いておく」と。アヒト。

「ああ、大丈夫だ。メイからだしな」

「メイさんから?」

つて、見なくても分かるの?

バイブルーションのパターンとかで区別しているんだろうか。

「ああ。どうせ『今どこにいるの』っていう電話だろ。あいつもいい加減、兄離れするべきだと思つんだけな……」

「兄離れって……」

キョウさんの何気ない咳きを、僕は思わず拾つてしまつていた。

「あいつ、今でも俺にべつたりだからな。いい加減兄離れしておかないと、彼氏とか出来ないと思つんだよ」

それに気付いたのか、キョウさんは続きを話してくれる。

「言われてみれば……確かにメイさん、うちの姉さんよりべつたりな気がしますしね

「だろ?」

僕が同意すると、キョウさんはようやく理解者が出てきた、とも

も言いたげな感じで言葉を続けた。

「いつも俺に抱きついて甘えてくるし」

「あー……」

うちの姉さんも、中学生くらいまではそんな感じだつたなあ。

……いや、今もか?

「それに俺の姿が見えない時は、ビニード何をしているかを聞いてくるし」

「……うちはそれは無いですね」

つてかそれ、兄妹としてはおかしくないかな?

「しかも抱きついてくるの、学校とかでもお構いなしだぜ? 恥ず

かしいからやめる、つていつも言つてるんだけどなあ

「

「うちの姉さんでも、さすがに人前ではやらないなあ……」

「極めつけに、この間は俺が風呂入っている時に一緒に入ろうとしたんだぜ？ もう子どもじゃないんだから、いい加減恥じらいとかを覚えてほしいんだがな……」

呆れたように、キョウさんはそう言った。

「うちの姉さんはむしろ、入浴中に風呂場に近づいただけで怒りますね……」

「このヘンタイッ！ って。

色気という単語からは程遠い体つきをしてくるせに……。

しかも血の繋がった姉なんだよ？

あれに欲情したら、確かにヘンタイだとは思うけど。

…………ん？

そこまで内心で悪態をついてから、頭に何かが引っかかった。というか、あることに勘付いてしまった。

「？ どうした、カズマ？」

それを敏感に感じ取ってくれたのか、キョウさんが声をかけてくれる。

「いや……ちょっとと思つたんですけど」

もしかして、メイさんって……僕が率直に、思つた事を言おつとしたその時。

「ああああああああああああああ！ キョウウッ！ やつぱつ！」だつた！！

ハキハキしていて通りの良い……通りが良すぎて、比喩表現でなく物理的に耳が痛くなるほどひの轟音が聞こえてきた。

メイさん、やっぱり声量凄い。

「め、メイ？ どうしてここが？」

突然現れたメイさんを見て、キョウさんは困惑した様子で訊ねていた。

「なんで電話出ないのよ……」

対するメイさんは怒り心頭、といった感じだ。

つてかもう、会話が噛み合つてない！？

「しかもメイを差し置いて、カズマなんかと二人きりで出掛けた！」

そのままメイさんは、キヨウさんに対してもくしたてる。  
つてか『なんか』つてなんだ、『なんか』つて。

「カズマは関係ないだろ！」

キヨウさんも言い返す。

つてか何だろ、これ。

兄妹ゲンカつて言うより……

「関係ないもん！ メイより、カズマの方がいいつていうのー。？」

もはや、痴話喧嘩だ。

もしかしてメイさんつて、キヨウさんのことが……。

2人のケンカを見ながら。

僕は密かに、そんな不穏なことを思つのであつた。

続く。

## 第05話・6月上旬、丹羅田（前書き）

ついでに、今年の放送劇の原題を決める口がやつってきた。  
みんなが持つてきた案とは。

そして、最終的にカズマたちは何をすることになるのか？

第5話。

お楽しみください。

\* 2011年12月26日に推敲、加筆修正を行いました。

放送部の部室内には今、放送部のメンバー6人、つまり全員が集まっていた。

今日もっとも大きな議題は、今年の放送劇の原題は決めることだ。僕ら門真姉弟の案は土日に姉さんと話し合ったので、既に決まっている。

思いつく限りで最善のものを選んできたので、正直、自信があった。

後は他の人たちがどんなのを考えているかだけだ……。

僕が黙考していると、姉さんが「それじゃあ始めるよ」と全員に合図をした。

「えーっと、兄弟姉妹で一つ考えてきたところってある?」

開始と同時に、ヒロコさんが全員に向かってそう呟ねる。

「つちはそうです」

まさに僕らのことだったので、迷わず肯定する。

「俺ンとこもそうです」

キヨウさんも続いた。

これでウチと守口兄妹は確定だ。

「ヒロコさんのところは?」ヒロコさんの聞き方でなんとなく予測は付くが、一応訊ねる。

「アタシらもそうだから……結局、案は3つしか無いのか」

ヒロコさんはだいたい、僕が想像した通りの答えを返した。

「みたい。まー、部のメンバーが3組の兄弟姉妹だから、そうなつても仕方ないかなあ……」

ヒロコさんの言葉に、姉さんが苦笑いで同意する。

個人で案を用意している人が1人もいないので、誰もそのことこの文句を言えなかつた。

「ま、とつあえずはあるものから聞いていけば最終的には何か浮かぶでしょ。各家ごとに発表しよう。というわけで……シズネ」先手必勝とでも言いたそうに、ヒロコさんは先陣を切つてシズネを促す。

「はい、お姉ちゃん。私たちで考えてきたのは、『不思議の国のアリス』です」

促されるままに、シズネは堂々と作品名を挙げた。

「あー、いいね。有名作品だし、大きく外れることが無さそう。桜ノ宮姉妹から出てきたのは、有名な文学作品だった。去年はシンデレラであったことを考えると充分に順当なのだが……桜ノ宮姉妹の言動は突飛なイメージがあるせいか、少し不思議だつた。

正直もつと、斜め上のところでくると思つていたのだが。

「んー……思つたより無難な作品で来たね？」

姉さんも僕と同じことを思つたのか、率直にそれを口にする。

「あー、まあなんていうか。シズネ相手だと、アタシがツツコウ回りやる見えなくなつてさ」

ヒロコさんは、一度軽くため息を吐いてからくたびれたような表情と声で語り始めた。

土曜日夜の夕食時、桜ノ宮邸にて。

「ねー、シズネ。結局今年の放送劇、何が良いと思う?」

シチューを口に運びながら、ヒロコはシズネに訊ねる。

「んー、クトゥルフ神話とかどうかなあ。最近、それにちなんだアーメやつていたし

「それ、どう再現するんだよ」

なぜか自信満々に語るシズネに、ヒロコが全力でツツコミを入れる。

クトゥルフ神話なんて詳しく知らないが、確かに人外の物語だった

はずだ。

「……じゃあ、アーサー王物語は？」

「長すぎだつて。上映時間は前半・後半あわせて1時間しかないからね？」

さつきよりはまともだが、それでも上映時間を考えるとそこまで壮大な物語をやるのは難しい。

去年・一昨年から脚本 자체を手伝つていたため、どれくらいだと『長すぎ』なのかの目星はもうヒロコにはついている。

「んー……じゃあ日本の作品で……白雪姫とか？」

「んー、そつちだと短すぎかな。前回のシンデレラも、原作だけだと短すぎたから大分肉付けしてたし……原型が分からなくなるくらい」

去年の超展開が多発した放送劇を思い出し、ヒロコは密かに苦笑いをする。

ガラスの靴がぴったり合う人がシンデレラ以外にも何人か居たので、さらに細かい選定に入る……なんてシーンを考え、台本を書き切つた先輩は今でもヒロコにとつては尊敬すべき人だ。

「じゃあ……もひゅうっと長い作品の方がいいのかな。水滸伝とか

「『ひょっと』どころじゃなく長くなつた！　しかも何人要るんだよ、それ！」

キャストが108人以上必要な作品なんて、無茶振りもいいところだ。

「じゃあ……三国志？」

「水滸伝と同じ理由で却下！」

……そんなやり取りが夕食を終えてから、丸一日ほど続いて。

最終的には、ヒロコが去年候補として出ていたものの中から、一番無難そうなヤツを選んで強引に終了せざるを得なくなつたのであつた。

「……なんていうか、お疲れ様です」

ヒロ「さんの簡潔な回想を聞いて、メイさんが苦笑いしながら辛うじてそう告げる。

「ええ、大変でしたよ~」

なぜかそれにシズネが応えた。

「大変にした張本人がねぎらいの言葉を受け取るなつて……」

僕は咳くようにツツコむ。

あと、シズネの無邪氣で無意識な無茶振りの前半部分が、姉さんがやりたそうにしていた案と同じなのはどういうことだ。

シズネも姉さんと同じようなアニメを観ているんだろうか。

「ちなみに不思議の国のアリスの場合、アリスは誰で考へてる?」  
僕が割とどうでもいいことに思考を廻らす隣で、姉さんはヒロ「さんに質問していた。

「ああ、メイにやつてもらつつもり。アタシはひょっとアダルティすぎるし、シズネだと緊張感出ないし」

ヒロ「さんは最初から想定していたのか、それにすりすりと答える。

「私の場合も、あだるていーすぎるから~」

姉さんが懸命に色っぽい声を出して訊ねる。

しかしながら……中途半端すぎて、かえつて微笑ましいものになってしまっていた。

「いや、マジカは幼すぎ」

「…………」

しかもヒロ「さんは普通にスルーされ、否定されてしまった。

……哀れだ。

「……なるほどね。えっと、キョウくんらは?」

やや凹みながら、姉さんは次にキョウさん達に訊ねる。

「あ、ハイ。俺たちは……メイの強い希望で、ロミオとジュリエットです」

メイさんの強い希望……

「ということは、配役はキヨウさんがロリオでジュリエットがメイさんですか？」

嫌な予感がした僕は、とりあえずそう訊いた。

「ん？ ああ、よくわかったな」

僕の問いに、キヨウさんは、感心した様子で頷いた。

なぜ分かったんだろうと思つていそうな、不思議そうな顔で。

……いや、メイさんあからさま過ぎでしょ。う。

なんで『なぜそれを言い当てられたのが分からない』みたいな顔してゐるんですか。

そんなキヨウさんの様子に、メイさんもなんとも形容しがたい微妙な表情をしていた。

「なるほどねー。じゃあそろそろ私たちの番かな」

姉さんが意気揚々と立ち上がる。

姉さんも僕同様に、自信満々だつたようだ。

「うちの学校にさ、七不思議つてあつたよね。あれを題材に出来ないかなつて」

姉さんはハキハキと、いつも以上に良く通る声でそう言つた。

「ああ、あつたね」

姉さんの意見に、ヒロコさんが食いついた。

そう、要は『学園の七不思議』だ。

だいたいの学校にあるメジャーナ話であるため、ある意味身近という点も相俟つて面白いのではないか。

それが、以前買った都市伝説の本を眺めていて浮かんだアイデアだつた。

「うちの学校、七不思議なんてあつたんですか？」

シズネは聞いたことが無かつたのか、おおよそ全員に向かつてそう訊ねていた。

「ああ、いくつか聞いたことがあるぜ。夜中にはブレイクダンスする人体模型とか、真夜中に逆再生されるチャイムとか、シズネの質問に、キヨウさんが答える。

「メイも知ってるよ。深夜2時、職員室の窓ガラスが全てマジックミラーになるとか真夜中の3時に一富金次郎の像が薪でジャグリングを始めるとか」

メイさんも続けて話してくれた。

「僕は一応、既に姉さんからひと通り聞かされていたので知つていたのだが……なんていうか。

うちの七不思議つていちいち突っ込みどころがあつて素直に怖がれないんだよな……。

「深夜4時、グラウンドに巨大なダンスホールが浮かび上がって、学校で死んだ生徒や職員のゾンビや亡靈たちがダンスパーティをしている、なんてのもあるよね」

「……いつも思うけど微妙に楽しそうだよなあ」

姉さんがまだ上がってないのを言つと、ヒロコさんがぼそっと突つ込みを入れた。

「あとは……無限階段の計6つで全部でしたよね」

記憶を辿るように、キヨウさんが最後の一つを挙げる。

「そだね。7つ目を知つてしまつた人は、怪死してグラウンドのダンスホールに送られるから、知つている人間はいないつて言われてる」

姉さんがそう言つて、七不思議の概要を締めくくる。

「……怖いような、シユールすぎてむしろ笑えるような」

ヒロコさんが再びツッコミを呟いた。

「無限階段ってなんですか？」

七不思議についてまったく聞いたことのないシズネが、唯一名前だけではいまいち概要のつかめない『無限階段』について確認してくれる。

「よくぞ聞いてくれました！」

その質問に、姉さんが嬉しそうに反応する。  
まあ当然といえば当然だらう。

何しる。

「何を隠そう、私たちが本筋にしようとしてるのほどの話なんだよ。なんだかんだで、これが一番深いからね」

……ということだ。

「もうなんですか？」

姉さんの断言に、シズネが不思議そうな反応を示した。

「うん。これだけ変に、ストーリーがしつかりしてるんだよね」

それにヒロコさんが補足する……といふか語りだした。

「夜の8時。部活が終わって帰ろうとしたある生徒が、途中で忘れ物に気付いてね。最上階である3階にある教室に取りに行こうとしたんだけど……どれだけ階段を上つても、階段が途切れず、最上階に辿りつかないんだ」

ややおどりおどりしい雰囲気で、ヒロコさんが話を紡いでくれる。普段明るくておおらかなヒロコさんだから、こじこじダークな雰囲気を作つて話すのは何だか新鮮だった。

「どれだけ階段を歩いても、ずっと踊り場に出ていて一向に上の階にたどり着かない。不安になつて今度は下の階に向かつて歩いた……というかもう、ほとんどパニックになつて駆け下りてたらしいんだけど……やつぱりというか、今度は下の階にたどり着けない。ふとどれくらい時間が経つたのか気になつて時計を見ると……デジタル時計は8：08と表示されたまま、止まつてたんだ」

「止まつてた？」唯一詳細を知らないシズネが、続きを促すように訊ねる。

「うん。デジタル時計にはちゃんと、数字が映つてるんだよ。でも、秒の単位が0.8のところで止まつてて、ずっと見つめていても動かないのね。それでその子はもうどうしようもないくらいパニックになつて……腕時計を外して、壁に投げつけたらしいの。そうしたら時計が壊れて、気付くと1階と2階の間の踊り場に立つてたんだっ

て」  
「……えーと、なんで?」特に怖がる様子も無く、シズネは淡々と訊ねていた。

「つーん、算用数字の『8』っても、90度傾けると（無限大）の記号になるじゃない？だから、デジタル時計でもっと多く、そして早く8が並ぶ瞬間である8時8分8秒に、それが起こったんじゃないかって言われてる。時計を壊したら、脱出できたっていうラストだしね。で、マドカ。これに肉付けして、話を作ればいいの？」

シズネに話し終えてから、ヒロコさんは姉さんにそう確認する。「んー、そのつもりで考えてたんだけど……改めて聞くと短い気がしてきた」

少し考えてから姉さんが答える。

「そうですね……確かに、肉付けするにも短すぎると思います」  
キヨウさんが姉さんの懸念に同意した。

長すぎ、短すぎの感覚はさすがに一年生である僕には分からない。シズネも僕と同様らしく、きょとんとしていた。

「じゃあ、こいつのはどうですか？」一組のカップルが学校に迷い込んで、前編と後編でそれぞれ3つずつで6つの不思議を体験する、つての

僕が戸惑っていると、メイさんがそんなことを言い出した。

「あー、それいいな。それで行こう！」

それにヒロコさんが食いつく。

脚本はヒロコさんがメインで書くことになつてこむため、最終的な決定権はヒロコさんが持つている。

彼女が『行こう』と言えば、それで決定だ。

「じゃ、決まりだね」

それを察した姉さんが、嬉しそうにそう言った。

「ああ。今年の放送部の演目は、『阿鳥学園七不思議』だ！」

ヒロコさんも、楽しそうに声を張り上げた。

メイさんも満足そうな顔をしているのは……考えなによつし

う。

とうあえず。

今年の放送部の演目は、無事決定したのであった。

そして、その日の帰り道。

「決まって良かったね」

他の4人と下駄箱や校門で別れてから。

僕は姉さんに話しかける。

「そうだね。ちょっと考えてたのとは違うのになつたけど  
やや不満そうな内容の台詞を、姉さんは弾んだ声でそう言った。  
なんだかんだ言つても、自分の持ってきた案が最終的な内容のベ  
ースになつたことが嬉しいんだろう。

「にしても、カズマもいいの思い付いたよね。うちの学校に七不思  
議があつたこと、知らなかつたんでしょう？」

上機嫌なまま、姉さんは日曜日辺りの話を引っ張つてくる。

「んー、まあ去年まで行つてた中学にあつたからね。もしかしたら  
高校にも、つて思つたんだよ」「

「さすが私の弟！ 姉さん鼻が高いよー」

僕が答えると、姉さんが相変わらず上機嫌にそう言つた。

いつもなら「そうだねー、高いねー」とて言いながら姉さんの絶  
対的な小ささを強調してやるのだが、今日は僕も機嫌がいいからや  
らない。

そのまま、姉さんとまた他愛も無い話を続けていると。

ぶーん、というバイブレーションの音が聞こえた。

ズボンの、ケータイを入れているポケットに触るが、震えている  
手触りは無い。

となると、僕じゃなくて姉さんか……そう思ったのとほぼ同時に  
さらに、姉さんがスカートのポケットから携帯を取り出していた。

姉さんは「ちょっとごめんね」と言いながら、ケータイを開いた。  
電話に出る素振りは無いため、メールだと分かった。

「？ 誰だらう」「ボタンを押してから、姉さんはそんなことを呟く。

「どうやら登録されてないアドレスからのメールらしい。」

「えうと」

姉さんはやや怪訝な顔で、ケータイを操作していた。  
きっとメールを読んでいるのだろう。

ルート

え、ええええええええ！？

姉さんは、僕の隣で驚きの声を挙げたのであつた。

続  
く。

第06話・6月上旬、火曜日（前書き）

マドカに届いたメールとは？  
一通のメールから、カズマたちの日常は動き出す  
！

## 第06話・6月上旬、火曜日

放送劇のテーマが学園の七不思議に決まつた翌日の放課後。

僕、こと門真一馬は学校の体育館裏に潜んでいた。

阿鳥学園の体育館裏は、『体育館裏』の一般的なイメージをそのまま再現したような状態になつてゐる。

外からはまるで城壁のような高い壁に覆われているため中の様子が見えず、また体育館自体校内の端っこにあつて学内の人間もあまり目をやる機会がない場所であるため、人知れず何か……例えば決闘や告白をするには持つて來いの場所なのだ。

そのため、アト学では定番の呼び出しスポットとして使われている。同性から呼び出されたくない場所としてはぶつちぎりでワーストワンなのは言うまでもない。

……まあそれはいいとして。

潜んでいる、という表現で既に察している人もいるかもしねないが、今日ここに呼び出されたのは僕では無い。

僕は一度考え事をやめて、改めてその呼び出された本人の観察に集中した。

視線の先には、ランドセルを背負つても違和感が無さそうな身長体型それに顔つきをした高校3年生、僕の姉さんである門真円が、どこか落ち着かない様子でそこに立つてゐる。

そう、呼び出されたのは僕の姉さんだつた。

姉さんを呼び出した人間と、その目的は。

昨日の放課後、姉さんに届いたメールにすべて書いてあつた。

「ええええええ！？ カ、カズマ！ これ見て、見て、見て！」

僕との雑談中に携帯に届いたメールを開くと、姉さんは近所迷惑極まりない驚きの声を上げた。

そしてその直後に、今度は興奮した様子で僕にメールを見せ付けてきた。

また厄介事かなあ……などと内心面倒に思いながら、僕はメールを読む。

「えーと、なになに……『門真円様へ。生徒会長の園口高司です。貴女にどうしてもお伝えしたいことがあります』突然ではありますがこうして直接、メールを送らせて頂きました。明日の放課後なのですが、体育館裏にお越しいただけないでしょうか。よろしくお願ひします』…………

えっと……つまりどういふことだろ?」

1回読んだだけではいまいち事態が飲み込めなかつた僕は、何度かそのメールを読み返す。

早い話が、呼び出しメールのようだった。

時間は明日の放課後、場所は同性には呼ばれたくない場所ワーストワンな体育館裏。

そして呼び出し主は、今年度の生徒会長である園口高司。名前から想像する限り、性別は男性で間違い無さそうだが……正直、それ以外は知らない。

つてか、普通生徒会長の顔とか人柄なんて覚えてないって。  
「……なるほど、決闘の申し込みか」半分くらい思考を停止した上で、僕は投げやりに呟く。

「なわけないでしょ!」姉さんに全力で突っ込まれた。

「……だよねえ。じゃあやつぱり」

同性には呼ばれたくない場所ワーストワンの体育館裏だが、逆に異性から呼ばれると、目的はほぼ告白、というのが定説だつたりする。

「へー、あの生徒会長が私に、ねえ……」

姉さんは年上の余裕を示すかのように、どこか尊大な言葉を放つ

た。

しかしその顔はだらしなく一やけている。

まことに残念だが、年上の余裕も威儀も何も感じられなかつた。

「つて姉さん、生徒会長のこと、知つていいの？」姉さんの知つてる風な口振りが気になつて、僕は思わず食いつく。

「うん、直接話したことは無いんだけど、色々聞いてるよ。つてかカズマ、知らないの？」

「……んー、外見と中身以外なら知つてるかも」

「何を知つてるのよ！？」

なんとなく『知らない』と言いたくなかったのでそのまま答へたら、姉さんに再び突つ込まれた。

「……名前だけ、かな」

「それ、絶対今メールを見て知つたことだよね……？」

ジト目で姉さんに睨まれ、僕は仕方なく首を縦に振つた。  
だから普通、1年生が生徒会長のことなんかおぼえてるわけないつてば。

「じゃあ、私が知つてる限りで話すけど。今年の生徒会長……あ、うちの生徒会長つて、基本的には3月に1、2年生の中から選ばれるんだけど

「あー、なんか4月くらいに担任から聞いた気がする。2月中に立候補した人の中から投票だつけ」

「そうそう。で、今年生徒会長の園口くんは当時1年生だったんだけど、票数ダントツトップで生徒会長になつてた。しかもテニス部にも所属しているらしくつて、去年は1年生でありながらレギュラーとして大会に出場、しかも彼が出て負けた試合は無かつたとか

「……何の漫画？」

1年生でレギュラー出場、しかも全試合負け無しつて……。

僕は思わず、姉さんもついに現実と妄想の区別がつかなくなつたのかと疑つてしまつた。

「実在してゐる人物だつてば。しかも成績も優秀で、テストでは常に

学年10位以内なんだって」

「文武両道で2年生の超人生徒会長か……ますます漫画だなあ。で、その非現実的な存在が、姉さんに何の用なんだろうね」「体育館裏つてことは、やっぱり告白なんじやない?」

嬉しそうな声で、姉さんはそう言つた。

どうやら、まんざらでもないようだ。

「なるほど、完全無欠と言われた今年の生徒会長は、年上の女性が好みかあ」

姉さんはどこか自慢げにそう呟く。

「……なるほど、完全無欠と言われた今年の生徒会長はロリコンだつたのかあ……」

なんだかムカついたので、全力で皮肉で返す。

と同時に両腕を前に構えてガードの体勢。

予想通り、直後に姉さんが無言で飛び回し蹴りを放つてきた。

「読めてるよ!」 言いつつ腕で姉さんのケリを弾く。

「ちつ! 大人しく食らええ!」

姉さんは着地するとすぐに、その反動を利用して後ろ回し蹴りで僕の中斷を狙つてくる。

「させるか!」

流石にガードは間に合わないので、後ろに飛んでそれを避ける。そしてステップから前進、殴りに行く。

もうお互いに攻撃パターンが分かつているため、最近の姉弟ゲン力は基本的に攻撃と回避の応酬になる。

それは日が沈んでから、二人がバテて飽きるまで続いた。

そして。

その後は若干険悪になつたせいか生徒会長のことはそれ以上聞けないまま、今に至る、というわけだ。

なんだかんだで気にはなつたので、僕は指定された場所である体

育館裏に潜んで、様子を見ることにしたのだった。

僕がここに来たのは帰りのホームルームが終わってすぐで、姉さんはその5分後くらいに、走ってきたのか少し息を切らせながらやつてきた。

隠れている僕に気付いた様子は無かった。

姉さんは基本、思っていることが顔というか全身に出るので、僕を見つけているなら間違いなく何らかの反応を起こしている。

それが無いため、気付いていないと言えるのだった。

また、生徒会長はホームルームが長引いているのかまだ来てない。

姉さんの表情は、僕に背を向けているため分からぬ。

しかし後姿でも、そわそわとした様子なのが分かる。

明らかに、生徒会長を待っていた。

なんだか、面白くなかった。

僕は姉さんに聞こえないよう、控えめにため息を吐く。そもそもなんで、僕はこんなことをしているんだろう。姉さんにカレシが出来ようが、僕には関係ないことだ。というか今まで浮いた話なんて一度も無かつたのだから、むしろ弟としては喜んでやるべきじゃないんだろうか。

そんなことを考えていると、がわ、と足音が聴こえてくる。音が聞こえたほうに田をやると、そこには1人の男がいた。

近くの建造物から目算すること、身長は175cmくらい。

……姉さんは、30cmものせし1・5本分以上の身長差があることになる。

さらにその男が近づいてくる。

その姿がはつきり見えて、僕は今度はやや荒っぽくため息を吐いた。

生徒会長が、想像以上のルックスだったからだ。

髪は見るからにさらさらで、顔立ちも整形でもしたんじゃないかなと疑いたくなるくらいに整っている。

そして体つきもどつちかといえば細く見えるのだが、ちゃんと筋肉が付いているのが分かるためなんだか頬もしく見える。いかにも女子にモテそうなタイプだった。

成績優秀スポーツ万能でさらにイケメン……『』の漫画の登場人物だと、改めて思つてしまつた。

その男は、姉さんの姿を見つけるとまるでテレビのCMに出ている芸能人のような爽やかな笑顔で手を振つた。

少女漫画なら、きっと歯が光つて背景には薔薇がちりばめられていただろう。

……もう、いい。

これ以上、そこにいるのが嫌になつた僕は、黙つてその場から駆け出した。

「んー……すつきりしないなあ」

適当に走つて、気付くと商店街にいた僕は、そのままゲームセンに入つて憂さ晴らしでもしようと格ゲーの筐体にコインを入れた。しかしいまいち集中できず乱入してきた誰かにあつさり負けてしまい、何度も再戦を申し込むも返り討ちにあつて。

今は不貞腐れて、ゲームセン内のベンチでジュースを飲んでいるとこだつた。

なんだかんだで長い時間やつていたため、既に時刻は19時を回つている。

でも、なんだか帰りたくなかつた。

帰つて、姉さんに今日の話を聞くのが嫌だつた。

さて、今からどうしようか……そんなことを考えていると。

携帯が震えた。

この震え方は電話だ。

姉さんだったらやだなあ……なんて思いながら、携帯の画面を見る。

そこには、『桜ノ宮広子』と表示されていた。

ヒロコさんからだ。

珍しいなと思いつつ電話に出た。

「はい、カズマです」

「今どこにいる?」

僕が答えると、ヒロコさんはすぐにそう訊ねてくる。

「えっと……アト学の傍のゲーセン、で分かります?」

ヒロコさんたちの家、反対方向だった気がするけど。

「ああ、あそこか。こんな時間にゲーセンにいるなんて、カズマは不良だなあ」

と思つたら、すぐに把握したようで、茶化すように僕にそんなことを言つてきた。

「……………切りますよ?」

「あー、待つた待つた、悪かつたつて!」

何だか嫌な予感がしてきたので強引に切らつとすると、ヒロコさんが慌てた様子で僕を止めてくる。

「もう、突つ込み担当のくせに沸点低いんだから……突つ込むの担当、つてなんかエロくない?」

「ナチュラルにセクハラ発言しないで、さつさと本題を話していください」

女性の先輩から男性の後輩にセクハラつて、めったに無いことだと思うんだけどなあ……。

「あー、『じめん』じめん。えつと、今から学校に来れる?」「は?」

あまりにもいつも通りのトーンで非常識なことを言つヒロコさんには、僕は思わず敬語を使うのも忘れて素で返してしまった。

「いや、今何時だと思つてるんですか」

とりあえず全力でヒロコさんに突つ込む。

ヒロコさんに突つ込む……いや、エロくなんか無いから。

「そうだね……PM7時半って言われるのと、19時半って言われ

るのびっちが好み?」

「AMとPMを略されると何時か分かりづらいので24時間制で言われる方が好きですが……つてそういう話じゃなくって。こんな時間に学校つて、もう最終下校時刻過ぎてるんじゃないですか」

アト学の最終下校時刻は19時である。

生徒会・部活動に例外は無く、生徒は必ずそれまでに下校しなければならない、と生徒手帳に明記されているのだ。

というか18時半くらいになつたら、先生達に追い出され始める。以前放送部の会議が長引いていた時も、18時半になつたら見回りの先生がやってきて早く帰れ、とどやされたのは記憶に新しい。今から入ろうとしても、まず間違いなく門前払いを食らうだろう。

「いつたい、何をするつもりなんですか」

呆れながら、僕がそう訊ねると。

「もちろん」ヒロノさんは、とても楽しそうな声で。

「肝試しさ

すでに辟易している僕にて、そう言つたのだった。

続ぐ。

## 第06話・6月上旬、火曜日（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか。

次回は、ヒロ「さんとの肝試しです。多分。

## 第07話・6月上旬、火曜日（前書き）

前回の続き。

学校の七不思議ならぬ六不思議に挑もうとする、ヒロ」「とカズマの運命は？

## 第07話・6月上旬、火曜日

「こんばんわ、ヒロコさん」

学校から一番近いコンビニで立ち読みをしていたヒロコさんに、元気な声を掛けた。

「お、カズマ、来たか」

「ええ、来ましたよ」

僕は少し疲れた声でそう答える。

ヒロコさんに付き合うのは正直、色々と危険な気がしたのだが。それ以上に今はなんだか帰りたくないなかつたし、あるいは姉さんのことを、ヒロコさんに相談してもいいかも知れない。

そんな考えもあつたため、結局付き合うことにしたのだ。

「ふふん、さすがはアタシの可愛い後輩君だねえ。時間は……19時45分。よし、行こうか」

「行くつて……本気なんですか？」

だから僕としては、ヒロコさんを止めてファミレスなりファーストフードなりで駄弁る方が好都合だつたりする。

というわけで、僕は全力で止めに掛かつた。

「もちろん」

だがヒロコさんは、いつも通りのやる気に満ちた笑顔で即答する。どうやら本気なのは間違いないようだ。

「どうやって入り込むんですか？ 校門は閉まってるし、絶対に警備してる人がいますよ？」

とりあえず、一番現実的な疑問をぶつけてみる。

「3年生を舐めないでほしいね。抜け道なんていくらでもあるわ」「なんだ様子はまったく無い。

ヒロコさんはむしろ不敵な笑みすら浮かべて、そう返した。

「でも、万が一ばれたりしたら……内申に響きますよ？」

ならばヒロコさんが3年生、ところのを逆手に取つてみる。

今年受験なのだから、問題を起こしたときのリスクは一年生の僕よりも高いはずだ。

「内申下るのが怖くて、放送部にいられるかつての……確かに毎回、放送部で色々とギリギリ（アウト）な発言をしては姉さんに物理的にカツトされてましたね。激しく納得してしまった僕は、次の言葉を探した。

「んー……肝試しつて普通7月か8月にやるもんじゃないですか？」

だったら、根幹を揺るがしに行こう。

もうこれしかない！

「やりたい時にやるから楽しいんじゃない」

しかし、一瞬の躊躇も無いままにヒロコさんはそう返した。

……ヒロコさんって、そういう人だよね。

多分思い立つたから、で真冬でも肝試しの企画とか持ち出してくる気がする、この人。

「んー……」

「降参？」

次の言葉を考える僕に、ヒロコさんは誘いつゝような瞳で訊ねてくる。

「…………」

必死で考えるが、正直もう何も思いつかなかつた。  
というか、何言つてもこの人には無駄な気がする。

「…………わかりました、降参です」

僕は頃垂れながらそう言つた。

「よつしゃ、じゃあ行こつか！ ついといで、カズマ！」

それから。

僕は嬉しそうなヒロコさんに手を引かれ、うんざつした気持ちで学校へと向かうのだった。

そして。

僕とヒロコさんは、無事校舎内に侵入していた。

何気なく携帯を開くと、時間は19：55と表示されている。

思つたより時間も掛かつていなかつたようだ。

「……初めから、こいつするつもりだつたんですね？」

靴音が校舎内でやたらと響くのを気にしながら、僕は呆れた風に

そう言つた。

「まあね」

対するヒロコさんは、得意げに放送準備室の鍵を指でくるくると回している。

ヒロコさんが取つた手段は、想像よりシンプルだった。

まず学校の敷地内には、鉤のついたロープで塀を越えるというまるで忍者のような手を使つた。

鉤を引っ掛けた場所も、本人曰く特に監視の薄いところらしい。なぜそんなことを知つてているのか、と訊ねたら放課後に調べたとあっさり答えていた。

ついでになぜロープで壁を上るなんて芸当が出来るのかも訊ねたが、そつちは『乙女の秘密』といふことで教えてくれなかつた。

乙女の秘密、といふには物騒すぎる気がするんですが。

さらに言えばヒロコさんがその技術を習得しているのはいろんな意味で危ない気がするのだが……もうそれは考えないことにした。そんな感じで学校の敷地内に潜入した後は、再び鉤を使って校舎の壁を上り、鍵が掛かっていない部屋の窓から入り込んだ。

もちろんその『窓に鍵が掛かっていない部屋』とは……放送準備室、僕ら放送部の部室のことだ。

ヒロコさんは校舎の壁を上るとき、一直線に放送準備室の窓に向かつっていた。

どうやら、僕が想像していた以上に計画的な行動であるようだ。

「で、どうするんですかこれから

というわけで、今後の計画を問いただす。

「もちろん七不思議ならぬ六不思議を、ひとつずつ体験する。ますは無限階段から…」

「こまちや」

意気揚々、といった感じでヒロ「わんは断言する。

対する僕はついぞ口をついてこの話を隠さず、ため息を吐いた

改めて口をひきの石三郎を見た。頭地で見ても、一七九が死

壊して抜け出すといつままで体験する気満々のようだ。

「そういえば、あれって確か1階から3階に上がろうとした時に起つ

「ああ…… われへりこは融通を利かせてくれるごじやない?」

新編夷語辭書

まあそんな難しそうな顔しないで。行こう?」

そんなことを考えていた僕の手を、丘田れんはやうにながら引いていった。

そして。

.....

僕とヒロコさんは、互いに何を言つていいかわからず、その場で黙り込んでいた。

ちなみに『その場』とは1階の廊下である。

僕とヒロコさんはあれから、普通に階段を降りて……何も起こら

ないまま、1階へとたどり着いたのだった。

「やっぱ何も起きてないか」

苦笑いしつつ、ヒロコさんが沈黙を破った。

実際に何か起こるとは本人も思っていなかつたのか、言葉通り『やつぱり』という顔をしている。

「他のも検証してみます？」

なんだかこのまま帰るのも寂しい……そう思つた僕は、『気付くとそんな提案をヒロコさんにしていた。

「アタシはかまわないけど……次、22時よ？ それまでどうする？」

「え、2時間後なんですか！？」

さりと答えたヒロコさんに、僕は思わず驚きの声を返した。

その後慌てて口を塞ぐ。

ヒロコさんも慌てて自分の唇に人差し指を当て、いわゆる静かに！ のポーズをしていた。

あまりにもヒロコさんが堂々としていたので忘れかけていたが、僕とヒロコさんはここに忍び込んでいるのだ。なるべく慎重にいかないと……。

「うん、2時間後だね。22時に、理科室の人体模型がブレイクダンスを始めるって話だから」

ひと通り落ち着いてから、気持ち控えめな声でヒロコさんが僕にそう解説してくれる。

「2時間か……長いなあ」

「見つかったら面倒だし、とりあえず部室に行こうか」

僕がぼやくと、ヒロコさんがそう提案してきた。

「そうですね。2時間も警備の用を握りつつ時間つぶしなんてやってられませんし」

その提案に乗らない理由も無いため、僕は素直に頷いて部室を田指した。

さつきは降りた階段を、今度は一人で上がる。

現在時刻を携帯で見ると、20時08分と表示されていた。

AM・PM制で言うと8時8分、無限階段が発生した時間である。

降りる時なんとも無かつたのは、単に数分早かつただけだとしたら？

脳裏にそんな考えが浮かんで、背筋に悪寒が走った。

ヒロコさんもそれに気付いたのか、僕と、自身の腕についている時計を交互に見つめている。

「さんの足は止まらない。

そのまま、一人緊張感で声も出せないまま歩き続けて……3階にたどり着いた。

「つて、やつぱり何も起こらんのかい！」

僕は忍び込んでいたという事実も忘れて、大声で突っ込んでいた。

「ばか、カズマ声大きい！」

ヒロコさんはそれを、慌てて咎める。

と、同時に。

「誰かいるのか？」

と、おじさんといつこはやや若く……多分30代前半くらいの男の声が聞こえた。

視線の先には、懐中電灯の光らしきものが映つている。

どうやら、警備で回っている人がたまたま近くに来ていたようだつた。

「まづい……カズマ、こっち！」

ヒロコさんは言つが早いが、僕の手を引いて物陰へと隠れ、僕に抱きついた。

「ヒ、ヒロコさんッ！？」

さすがに声を上げたらまづいことくらいは分かっているため、小声で僕はヒロコさんに抗議の声を上げる。

「しつ、静かにして！ 見つかっちゃうから」

しかしヒロコさんはそんな僕にかまうことなく、限界まで身をかがめて息を殺していた。

警備員の足音が、段々近づいてくるのが分かる。

「誰かいるのか？」

警備員は警戒している様子で、さつきと同じ台詞を言った。

近くで、足音が響く。

もしかしたら、僕たちを探しているのかもしれない……と思いつきや、足音は段々遠ざかっていった。

声のトーンも2度目はなんだかダルそうだったし、あまり仕事熱心な人では無かつたのだろう。

隠れている僕らを、わざわざ探すことにはしなかつたようだ。遠ざかる足音と一緒に、「氣のせいか……」といつ呟きが聞こえたから、とりあえずは一安心である。

「……行つたみたいだな」

ヒロコさんも僕と同じ判断をしたのか、よつやく息を吐いてからそう言つた。

「みたいですね……すいません」

僕は素直にヒロコさんに謝る。

さすがについ、ツツコミにチカラを入れすぎた。

「何、スリリングで楽しかったさ」

ヒロコさんは、それを爽やかに笑つて許してくれた。

この気風のよさは、ヒロコさんの魅力の一つだと思つ。

でも、僕が素直に謝つたのは……反省だけが理由では無い。

「なら良いんですが……そろそろ、放してもらえないでじょうか……」

僕は意を決してそう言つた。

というのも、今僕は、相当地わざい状態にあるからだ。

警備員らしき人が去つてから、僕はここがどこかを認識した。

改めて考えてみれば、明らかに男性であつた警備員がここを探さなかつたのは当然だらう。

ヒロコさんが僕の手を引いて逃げ込んだのは……女子トイレの、しかも個室の中だつた。

それに気付くと、トイレ独特の臭いと、すぐ傍にいるヒロコをさ

の匂いが鼻を刺激する。

さらに隠れるためにヒロコさんに思いつきり引っ張られ、そのまま強く抱きしめられたこともあって、肌も完全に密着していた。ヒロコさんの暖かさと柔らかさを、僕は今全身で感じてしまっている。

今見つかっていたら、間違いなく校内でアレな行為をしようとしていたカップルと勘違いされただろう。

「ん？ あー、ごめんごめん。じゃ、部屋ここつか」

しかしヒロコさんはそれを気にする様子も無く、僕を普通に解放してからそう言った。

本当に、図太い人だ……。

僕は後ろで顔を真っ赤にしながら、ヒロコさんの後ろをついていつた。

「さて、あと1時間30分か。何して暇を潰す？」

道中に警備員がないことを確認してから、僕とヒロコさんは再び部室に入り込んでいた。

もちろん扉には鍵を掛けているし、電気もつけていない。

月の光だけが、今の僕らが頼れる唯一の明かりだった。

「……電気をつけるわけにもいかないですから、やれることも限られていますよね」

ヒロコさんの問いかに、僕は考え込みながらうつむく。すると。

「……変なことしたら、イイ声で鳴くからね？」

ヒロコさんはいきなり四つんばいになつて僕に近づき、耳もとでそんなことを囁いた。

吐息掛かっていて、それでいてどこか甘美を感じさせる色っぽい声だった。

しかもそれを言つた時、僕の耳にはヒロコさんの息が掛かる。思

わざ背筋がぞくつとなつた。

「しませんよっ！」

僕はヒロコさんから逃げるよつに下がつゝ、控えめな声量を維持しつつ全力でシッコんだ。

下手に乗ると、僕の貞操が危ない。

ヒロコさんはそんな僕を見て、あつさういつもの笑顔に戻ると身体を起こしてその場で胡坐をかいた。

その瞬間、白い太ももの奥に黒いものが見えた気がした。いや、何も見えていないことにしよう。

「カズマ、顔が真っ赤じゃん？ 何か見えた？」

なんて思つてゐると、ヒロコさんが冷やかすようにそんなことを言つてきた。

「見えてないです、黒なんて…」

僕は慌てて否定する。

「……いや、ばっかり見えてるじやん」

ヒロコさんはからからと笑いながらシッコんだ。

……否定できてなかつた。

「ま、いいんだけどね。カズマもなんていうか……くタレといつかチキンだよね。あるいは、好きな人でもいるの？」

ヒロコさんは楽しそうに、そんなことを言つてきた。

そう言われて、僕はようやくヒロコさんに聞きたかったことを思い出す。

もちろん、姉さんのことだ。

「んー……それなら、聞きたいことがあるんですけど」

「お、なになに？」

僕が切り出そうとするが、ヒロコさんは嬉しそうに反応した。顔に『待つてました！』と浮き出でるよつな『仮』さえある。

その反応を見て、僕は少し考えた。

そういうえば姉さん、ヒロコさんに生徒会長から呼び出されたこと話をしてくるんだろうか。

なんとなくだが……話していくような気がする。

確か姉さんとヒロコさんは別のクラスだつたはずだ。

せりに言えばヒロコさんは、今までの話から察するに一田中、夜いつやつて潜入するための情報収集をしていたと考えて良さそうだから知らないかもしねない。

だったら、姉さんのことはまだ直接話さない方がいいんじゃないだろうか。

ふと、そんなことを思った。

「あ、えっと……」

そこまで考えてから、僕は思わず言葉を止める。

なら、質問は慎重にした方がいい。

変に姉さんを話題に出すと、ヒロコさんは鋭いから感付くに違いない。

「えっと、仮の話なんですか。例えば……シズネにカレシが出来るとしたら、ヒロコさんはどう思います？」

ヒロコさん自身に置き換えて、訊ねてみることにした。

立場的にはヒロコさんよりもむしろシズネの方が相応しいのだが、感の鋭さまで考慮したら相談相手はヒロコさんで間違いないだろう。

「……ふーん、なるほどね」

少し考えてから、ヒロコさんはやりと笑つてそう言った。

僕のことを、意味深に見つめながら。

「なるほど、カズマの気持ちはよく分かつたよ。そだね、アタシは……シズネが幸せなら、それが一番だ」

「ヒロコさん……」

僕をからかうような言葉の直後、急に真面目な声で。

ヒロコさんは、もう言つた。

声のトーンから、ヒロコさんがシズネをどれだけ大切に思つているかが感じ取れた。

正直、放送部の3きょうだいの中ではあまり仲が良くない姉妹だと思つていた。

でも、実際そんなことは全然無かつたようだ。

むしろ、家族を想う気持ちは僕より強い……そう感じさせられた。「やっぱりあの子は、アタシにとっては大切な家族だから。まあ姉としては、先越されるのはちょっと悔しいけどね。でもそれ以上に、アタシはあの子には幸せでいてほしいと想うんだよ」

ヒロコさんは意志のこもった瞳で、僕をまっすぐ見てそう断言した。

迷いなんてまったく無い。

それがヒロコさんの、揺るがない本心であることが伝わってきた。

……確かに、そうかもしない。

僕もなんだかんだで、姉さんの笑顔を見るのは好きだ。

そして逆に姉さんが悲しそうな顔をしていると、僕までなんだか憂鬱になる。

きつと家族とはそういうもののなのだろう。

そこまで考えた時。

僕はやっと、姉さんを祝福してあげようと、うつ氣になれた。

相手の人だつて聞いている限りじゃ成績優秀、スポーツ万能な生徒会長とケチをつけるところなんかありやしない。

そんな人が姉さんに告白してくれたのだから、これ以上喜ばしいことも無いはずだ。

僕が内心で、そんな答えを出した時。

「よし……じゃあ、今日はもうこれで帰ろうか」

ヒロコさんが、僕にそう提案してきた。

「いいんですか？」

答えが出た今、正直この申し出は有り難かった。

でも、なんだか僕の勝手な都合で解散にしてしまったような気がして、僕はそう訊ねる。

「かまわないよ。アタシも帰つてやりたいことが出来たからね」

だがヒロコさんはそう言って、あっさり解散を決定した。

そうと決まつたら、行動は速かつた。

来た道を戻り、あっさりと校舎の外に出る。

そして、そのままヒロヒロさんに別れを告げ、僕は帰路についた。

帰つて、姉さんに『おめでとう』と言つたまに。

今なら、姉さんがどんなつまとうしこ白慢をしてきても笑つて祝福できる気がする。

僕はそんな晴れやかな気持ちで、家へと走るのだった。

続く。

第07話・6月上旬、火曜日（後書き）

ありがとうございました。  
続きはまた来週に！

第08話・6月上旬、火曜日～水曜日（前書き）

前回の続き。

ヒロコに諭されたカズマと、告白されたはずのマドカは？  
第08話、お楽しみください。

\* 2011年12月31日に推敲、加筆修正しました。

夜の帳が降りきつてもなお見慣れたと感じられる町を、僕は走っていた。

走りながら、僕は昔のことを探し出す。

それは、姉さんが中学一年生、僕が小学5年生だった頃の話。ある日姉さんは、傷だらけの格好で泣きながら帰ってきた。制服である半袖のシャツは刃物で切られたような傷がついていて、少し血が滲んでいる。

スカートも同じように埃と切り傷でいっぱいという……今見たら、暴漢か変質者に襲われたとしか思えないような酷い有様だった。そんな姿を見て、僕は読んでいた本も投げ捨て、慌てた様子で訊ねる。

「おねえちゃん、どうしたの！？」

今思い返すと、『おねえちゃん』といつ響きが懐かしい。姉さん、と呼ぶようになったのはいつ頃だつたつ……まあそれはいいか。それから、姉さんは泣きながらも何があつたのかを語ってくれた。終始しゃくりあげながらという聞き取りづらい事この上ない様子だつたのだが、当時の僕は純粋無垢かつ素直だったので、根気良く姉に何があつたのかを聞きだしていた。

そして、多分30分後くらいに。

「……つまり、近所の空き地にいたネコとケンカして、そうなつたつてこと？」

僕は、最初の心配そな雰囲気はどうへやらの完全にあきれ返った様子でそう確認した。

今思い返しても、違つてるのは制服だけで外見がまったく

成長していない姉さんが、乱れてくしゃくしゃになったツインテールを揺らして首を縦に振る。一緒に揺れたリボンが三毛猫柄のは、もはや皮肉の領域だつた。

そしてそこまで考えた当時の僕は、もうその時点で相手にするのが馬鹿らしくなつて。

既にその辺りから、姉さんの話を適当に聞き流していた。

……あれ、当時の僕、純粋無垢でも根気良くも無いな……まあいいか。

そんな感じで僕はどんどん興味を失つていったのだが、姉さんは逆に僕に話しあわせたことでまた戦意が湧いてきたらしく、「リベンジしてくる」と一度呟いて、着替えてからまた出掛けてしまったのだつた。

そんな姉を『飽きずにみくやるなあ』などと思いつつ見送つた僕は、リビングに戻つてさつき投げてしまつた本を拾い、ビニール袋に入つけ……などと思いながら、本を開くのだった。

そして、その本をちよつと読み終わつた頃、姉さんは帰つてきた。良く見ると腕も脚も……とこりか体中が擦り傷切り傷だらけだつた。

しかし、顔だけは晴れ晴れとしている。

「見なさい、カズマ！」

その顔が示すとおりの晴れ晴れとした声で、姉さんは誇らしげにそう言つて、自分の後方に視線を送る。

姉さんの視線の先を眼で追うと、そこには一匹のトラネコがいた。無駄な肉が一切無い、均整の取れたしなやかな体つき。

さらにはちょっとでも隙を見せたら狩られてしまいそうな、力強い野生の光を宿した瞳。

このネコ、相当なツワモノだ。

当時の僕は、子供心に一目でそう思つた。

「この子はファング。名前の由来は、私を一度退けたその強力なツメ。今日から、この子はファングよ！」

トラネコ改めファングを見つめながら、姉さんは得意げにそう言った。

なおこの後、父さんにファング(fang)は『爪』じゃなくて『牙』だ、と苦笑いで訂正されることになるのだが、それはまた別のお話。

これ以外にも、たくさんの姉さんとの思い出が頭を巡つていった。それこそ、思い出しきれないくらいに。

なんだかんだで、僕と姉さんは一般的な姉弟としても仲のいい方だと思う。

だから、正直に言えば姉さんに恋人が出来てしまつのは寂しかった。

もちろん今までに、姉さんが遠くに行つてしまつた時に感じたことが無かつたわけではない。

過去にそれを一番強く意識したのは……多分、姉さんが中学に上がった年だ。

4年間ずっと一緒に通い続けていた小学校に、いきなり1人で行かないといけなくなつた、というのが当時の僕にはなんだか凄く寂しく感じられた。

いつも当たり前のように隣にいた人が、急に居なくなつたのだから。

履き慣れていた靴が何の脈絡も無く壊れてしまつたような、あるいは使い慣れていた文房具をなくしてしまつたような……普通に生活するには困らないのだが、何か物足りなく感じる、そんな喪失感があつた。

しかしそれでも、家に帰れば、あるいは家で待つていれば姉さんに会えた。

でも、姉さんに恋人が出来るとしたら、そういうわけにもいかないだろう。

恋人の家に泊まつて、帰つてこない日なんてのもあるかもしだい。

だから、帰れば姉さんに会えるという安心感が……それすらもが崩れてしまいそうで、姉さんに恋人が出来ることを僕は素直に喜べなかつた。

でも。

ヒロコさんは、それで家族が……自分が大切に思つている人が幸せになれるなら構わない。

そんな考え方を僕に教えてくれた。

それでいいんだと、気付かせてくれた。

確かに、そうだとthought。

やつぱり姉さんは、僕の家族なのだから。

姉さんが幸せなら、僕にとつても喜ばしいことだ。

もし立場が逆だつたなら、なんだかんだ言いつつも姉さんは僕を祝福してくれただろう。

だから、僕も姉さんを祝福してあげよつ。

それが今、僕が姉さんにしてあげられる一番のことだと思つた。

そこまで考えて、僕はさらに走るスピードを上げた。

ひたすらに。

ひたむきに。

僕と僕の家族が住んでいる家へ、全力で駆けていった。僕の大好きな家族に、祝福の言葉を伝えるために。

家の前に着く。

ポケットから鍵を取り出し、ガチャガチャと回していると、足音が玄関に近づいてくるのが分かつた。

やや足音が軽い。姉さんだ。

鍵を開ける音で、僕の帰りに気付いたのだろう。

どうやら、自慢する気満々らしい。

いいさ、今日は存分にそれを聞いて、存分に祝つてやろ。」

僕はそんな懐の大きいことを思いながら、ドアを開けた。

玄関には、想像通り姉さんが待つていた。

「ただいま！ 姉さん、おめでとう！」

僕は帰宅と同時に、自分が出来る最大限の笑顔で姉さんにそう告げる。

「うわあああああん、カズマああああああー。」

一方姉さんは号泣しながら、僕に抱きついてきた。  
つてあれええええ！？

「え？ なんで？ どういうこと？」

姉さんの行動があまりにも予想外すぎて、僕は思い切り狼狽して  
いた。

「えぐ、えぐ、がいじょうが……うええええええん

姉さんが何か言おうとしている。

だがしゃくりあげながら話しているせいであつたく聞き取れない。  
「え、待つて姉さん！？ いきなりどうしたのさ！？ つてか何が  
あつたのさ！？」

冷静さを取り戻せないまま、僕は姉さんに訊ねていた。

「あらあら、カズマつたら。今でもお姉ちゃんにべつたりね」

しかし姉さんより先に、姉さんの声を聞いて様子を見に来た母さ  
んが、何か微笑ましいものでも見るような雰囲気をかもし出しつつ、  
そう言ってから通り過ぎていった。

良く見てください母さん、僕は抱きつかれている方です。

そう母さんにツツ「ミを入れるよりも、姉さんの方が気になつた  
ため僕は母さんを放置して姉さんの話を聞くことにした。  
さすがに玄関で続行すると母さんに何を言われるか分からぬの  
で、僕の部屋に移動してから。

そして。

姉さんをベッドに腰掛けさせて、根気良くな話を聞くこと30分。

僕はようやく、姉さんに何があつたのかを理解できた。

「……つまり、要約すると。放課後生徒会長には会えたけど、生徒会長は姉さんの予想外な小走りに引いたりして、結局告白もつやむやにされてしまった、と」

「……そう言わるとシャクだけじあつてる」

僕がそう確認すると、姉さんはしぶしぶ、と言つた感じで頷く。姉さんももう、普通に話せる程度には落ち着いているようだ。

「そつか……生徒会長、姉さんの言ひとおり年上がタイプだったのかな」

「……どう意味よ？」

僕が納得したように咳くと、それを耳をとく聽き取つた姉さんに睨まれた。

「だから、やっぱり姉さんは子どもっぽいってことだよ。姉さんなんかと付き合つてたら、口リコン扱いされてもおかしくないって」しかし僕は怯まず、茶化すようにそう返した。

「なんですつてえーっ！ 誰が子どもなのよッ！」

姉さんは、ネコが威嚇するような雰囲気で怒つてい。

「だつて、姉さんと出掛けたら、知らなにおばちゃんにしょっちゅう、『あら、お兄ちゃんとお買い物？ いいわねえ』なんて言われてるじゃないか。姉さん、僕の姉に見えないんだよ」「キーッ、食らえッ！」

遂にキレたらしく、姉さんはベッドから飛び降りると座つたままの僕に回し蹴りを放つてきた。

僕はそれを両腕でガードする。

僕に攻撃を止められた姉さんは少し下がつて体勢を立て直すと、そのまま飛び膝蹴りで僕に襲い掛かってきた。

さすがにこれは受けきれない、そう思つた僕は横に避けようとしたが……座つていたせいか、巧く避けることが出来なくて。

「くつー！」

結局姉さんの飛び膝蹴りを食らう羽目になってしまった。

急所は腕でガードしたため痛みは無いが、ベッドに押し倒され、

馬乗りされた状態になつてゐる。

「さあて、ここからどうじてやうつかしり。……」

僕を見下ろしながら、姉さんは不敵に笑う。

やや視線を落とすと、飛び膝蹴りの勢いで捲くれ上がったのか、水玉模様の下着が丸見えになつていた。

や、まあそれは別にどうでもいいんだが。今更姉のパンツなど見えても嬉しくないし。

ついでに言えば、胸にのしかかつてゐる姉さんも実はそこまで重くない。

その気になれば振り落とせそうだが……やめた。

落ち込んでいる姉さんを見たくなかつたからだ。

だから、僕とケンカすることでいつもの快活を取り戻してほしかつた。

それが、今の僕に出来る姉さんの慰め方だった。

……よく考えるとけつこうマジいことやつてる気がするけど。

そんなことを思いながら、姉さんからの追撃が無いことに気付く。

「……姉さん？」

気になつて姉さんの顔を見る。

その顔は……どいか、穏やかなものだつた。

「……ふう。やっぱ、いいか」

姉さんはそう呟くと、僕の上からあつさり降りる。

「姉さん？」

そんな姉さんが気になつて、僕は思わず声を掛けた。すると。

姉さんは笑つて、

「ありがとう、カズマ。おかげですつきりしたよ。恋人が出来なかつたのは残念だけど……ま、今の私にはカズマがいるし。今日はこのくらいで許してあげる」

そう言つた。

とっても自然で、可愛らしい笑顔だった。

太陽のよくな、暖かくて眩しい笑顔。

「僕を恋人の代わりにするのはやめてくれないかな」  
僕はそんな姉さんを何故か直視できなくて。

顔を背けて、ややぶつきらぼうに返してしまった。

「えへへ。いいじゃない、カズマ、だつて恋人いないんだし。それに  
私たちは家族なんだから、仲良いのが普通でしょ？」

「まあ、そうだけどさ」

嘆息しながら、僕は答えた。

僕がしぶしぶながら肯定すると、姉さんはそれで満足したのか、  
「よろしい！ それじゃあお休み！」と上機嫌で部屋に戻つていっ  
た。

憑き物が落ちたような晴れ晴れとした顔つきで。

互いに恋人がいない姉弟だから、どつちかに恋人が出来るまでは  
お互いがその代わり……か。

ちょっと恥ずかしい気もするけど、僕はそれ以上に暖かさを感じ  
ていた。

姉さんのことも、もう心配しなくて大丈夫だらう。

明日から……というかもう既に今から、いつもの姉さんに戻つて  
いたのだから。

これでようやく、僕たちに平和な日常が戻つた そう確信した  
僕は、気が抜けてしまったのか、気付くと制服姿のままで眠つてしまっていた。

「うーん、まだ首が痛い……」

制服姿のまま姉さんに起された僕は、軽くシャワーを浴びてか  
ら朝食を取つて姉さんとともに学校に向かつた。

「もう、変な体勢で寝るからだよ。あれほど暖かくして寝なさいつ  
て言ったのに」

僕が愚痴ると、姉さんがそう返してくれる。

「いや、今6月だし、暖かくしようとしたら暑くて寝られないから。つてかそれ以前に言われてないし、それ」

とりあえず突っ込めるところ全てに突っ込んだ。

なんだかこの、他愛の無い会話が懐かしい。

実際はせいぜい1日ぶりくらいであるため、懐かしがるほどのことでもないのだが。

それでも、僕は、当たり前といつことの大切さを昨日思い知った気がする。

この日常を、今は満喫していくても良いだろ？……そんなことを考えながら、姉さんとの他愛ない会話を続いていると。

校門前に、長い黒髪に銀枠で橢円形の眼鏡を掛けた、見慣れた少女がいることに気付いた。

「シズネ。おはよう」

誰かを待つているような雰囲気のシズネに、僕は何気なく声を掛ける。

するとシズネは嬉しそうに、薄い夏服のせいいか服の上からでもはつきり分かる胸を揺らして答えた。

「はい、おはようございます……えっと、旦那さま」

いつも能天氣でマイペース、柔らかな微笑み顔が特徴のシズネとしては珍しく、やや恥ずかしそうで頬は朱に染まっている。

その仕草は正直、凄く可愛いのだが……それよりも今、もつと気にすべき発言があつた気がする。

「えつと……シズネ、今なんて？」

というわけで、僕は迷わず聞き返した。

「……えつと、ダーリンとかあなた、とか呼ぶ方が好みでした？」

すると不安そうな顔で、シズネもそう聞き返してくれた。

ここまでシズネが感情をあらわにするのも珍しい……のだが今はそれを気にしている場合じゃない。

「ち、ちょっとカズマ！？ いつたいどつこつ」と一？ シズネち

ゃんがカズマを、だ、旦那さまって！？」

僕が一瞬考え込んでいた隙に、姉さんが根本的な問題に大慌てで突っ込んだ。

……どうやらまた、非日常がやってきてしまつたらしい。

続  
く。

第08話・6月上旬、火曜日～水曜日（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか。

マドカの件が解決したと思いきや、再び平穏とは程遠いカズマの日常。

次回はシズネとヒロコの姉妹が暴走します、多分。

第09話・6月上旬、水曜日（前書き）

シズネは突然、カズマを「旦那さま」と呼んだ。  
その真意とは？

門真一馬の愛すべき日常、第9話。  
早くもクライマックスです。

「……じゃあ、今日の放送はここまでー。また来週、お会いしましたー。ありがとうございましたー！」

姉さんがいつも通りの高いテンションで、お腹の放送を終わらせた。

しかし僕を含む放送部の面々は、それがどこかぎこちないといったことを既に感じ取っていた。

……まあ、しょうがないといえばしょうがないだろう。

正直今は、放送室内の空気がどこか張り詰めたものになっているのだから。

というのも。

いつもなら出番が終わったら後ろで待機しているはずのシズネが、何故か今日は僕の隣……姉さんの反対側にいるからだ。

幸せそうに、僕に身を寄せて。

とても嬉しそうな笑顔で。

一方、姉さんはとても微妙そうな顔をしている。

どうやら姉さんは、朝の一件からシズネとの接し方を図りかねているようだった。

「…いたいどうこう」とー? シズネちゃんがカズマを、だ、旦那さまでー!?

姉さんは、慌てた様子でそう叫んだ。

無理も無いだろう、正直僕自身、何がどうなつているのか分からぬ。ない。

とりあえず、改めて状況を整理しよう。

朝、姉さんと登校していると、シズネ……僕のクラスメイトで放送部の仲間である桜ノ宮静音<sup>さくのみや しづね</sup>がいることに気付いた。

雰囲的には、そわそわと周りを見ていて……誰かを待っている、そんな感じだった。

旦があつたので、「おはよう」と僕が挨拶すると、シズネは嬉しそうに挨拶を返してくれた。

そしてさらに「……僕のことを旦那さま、と呼んだ。  
念のために言つておくが、僕とシズネはそんな関係じゃない。どんな関係? なんて聞かれたら、クラスメイト、あるいは部活の友達、と答えるしかない関係だ。

だから旦那さま、なんて呼ばれる心当たりは無いんだけど……  
「答えなさいカズマあ! 昨日のアレはなんだつたの!?」『おめでとひ』って、お互い恋人が出来てめでたいね、とでも言つたかったの! ? こーたーえーなーさーいー! 「

考えていたら、姉さんに胸倉を掴まれた。

そしてそのまま、力任せに前後に揺すられながらまくし立てられる。

ああ、落ち着いて考えられない……ってか姉さん、そんなに思いつきり振り回されたら、答えたくても答えられないってば。姉さんも途中でそれに気付いたのか、一旦手を止めて、改めて僕を見た。

視線には「説明しろ」という意思がありありと籠つている。ついでに言えばちょっと涙目だ。

「えっと……」

しかしそれが解読できても、僕に説明できることは無い。さつきも思つていたことだが、そもそも僕にだって思い当たる節がまったく無いのだから。

というわけで僕も、シズネに旦で説明を求めるにした。

「? なんですか、旦那さま?」

シズネはすぐ僕の目線に気付いたようで、嬉しそうに笑つてそう

応えてくれる。

いつもは自然に微笑んでいるシズネが、満面の笑顔を向けてくれるのは可愛いと思うし、正直ドキッとする。

だが、今はそれに見蕩れている場合じゃない。

聞くべきことを聞いておかないとこの後が絶対、色々大変になる。

「ねえ、シズネ……」

というわけで、詳しく話を聞いたりとした。その時。

キーンコーンカーンコーン……と、聞きなれたチャイムの音が鳴つた。

「おおう、やっぱいやっばい。寝坊したア！」

と同時に、後ろから聞いたことのある声が聞こえてくる。

振り返ると、ヒロコさん……シズネの姉、桜ノ宮広子さん（さくのみやひろこ）がダッシュしてきている。

昨日の夜、夜の校舎で色々あつたため、ちょっと顔を会わせるのが恥ずかしいような……

「お、マドカ。急ぐよ、もうギリギリだ」

なんて考えてくる僕には見向きもせず、ヒロコさんはそう言つてしまや姉さんの手を掴んで下駄箱の方へと一切スピードを落とさずにそのまま駆け抜けた。

「え!? わ、ちょっと待つてヒロコン！ 私にはまだ、シズネちゃんに聞かないといけないことがああああああああ…………」

……ヒロコさんに引っ張られて、姉さんはそのままフードアウトしてしまった。

「……私たちも急ぎまじょうか、旦那さま？」

そんな姉さんとヒロコさんを見送りつつ、シズネが僕にそう提案していく。

チャイムの余韻と、それに従つて慌てた様子で駆け出していく回りの生徒達を見ながら。

考えるのが面倒になってしまった僕は、嘆息しながらシズネの提案に黙つて頷いたのだった。

そして結局何もシズネから聞き出せないまま、昼休みになってしまった。

休み時間にシズネに訊ねようとしたのだが……他のクラスメートに声を掛けられたり、あるいは肝心のシズネが声を掛けようと思つたらいなかつたりとで囁み合はず、結局何も聞けなかつたのだ。

各休み時間終了間際に姉さんから「どうこうこと?」というメールが来ていたことから推測するに、姉さんもどうやら何もつかめていないようである。

どこかギクシャクした雰囲気でお昼の放送が実行されて……ようやく、今さつき放送が終了した。

基本的に僕ら放送部は、放送終了後に放送準備室に移動して放送部のメンバー全員で昼食を取る。

そしてついでに、今日の放送の反省会議も行うのが通例となつている。

まあ反省会議といつても実際はヒロ「」さんの下ネタ発言にのみ姉さんから注意が飛んだり、お昼の放送のコーナーの一つである『うろおぼ演奏』担当の守口兄妹に他のメンバーから個人的なリクエストがあつたりと和気藹々な雰囲気での昼食会になるのだが……今日は違つっていた。

一番大きい違いは、座席だった。

いつもは室内に3つあるテーブルに、各きょうだいで分かれて座つてゐる。

しかし今日は、何故か学年別になつていた。

2年生である守口兄妹、キヨウさんとメイさん。ここだけはいつも通り。

おかしいのは、それ以外だ。

つまり姉さんと僕……では無く、3年生であるシズネの姉、ヒロ「」さん。

そして僕の隣にはシズネが座っていた。

しかも座ってる順番は、端から順に僕 シズネ ヒロコさん 姉

さん メイさん キョウさんという形である。

机は「の字型に置かれているため、僕の対面にキョウさんがいて

……僕とヒロコさんでシズネをはさむ席順だ。

いつもと比べるなら、ちょうど姉さんとシズネが入れ替わった形

になる。

「珍しい配置ですね？」

キョウさんもそれが気になつたらしく、何かあつたら一番元凶の可能性が高いと言われているヒロコさんに確認を取つていた。

「何よキョウ、そんなこと、どうだつていいじゃない……」

メイさんがそう呟いたのが聞こえたが、気にしないことにした。

「ええ、本日はわたし、田那さまの分もお弁当を作つてきましたか

ら

キョウさんの疑問に、シズネが上機嫌に答える。

「えええええええええ！」

今シズネ、なんて言つた？

「えええええええ！？」シズネちゃん、今なんて言つたの！？」

直接声に出すかどうかの違いはあるが、姉さんも僕とまったく同じ反応をしている。

いつもシズネはヒロコさんの分もお弁当を持つてきているので気付かなかつたが、言われてからシズネのお弁当袋を見ると確かにいつもより大きい気がした。

「どうやら本当らしい。」

ちなみに僕と姉さんの今日のお皿は、母さんが寝坊したため朝に買つたいくつかの菓子パンだ。

「……『田那さま』？」

その響きにキョウさんも疑問を持つたらしく、僕に田を向ける。

「ふーん、もうそういう関係なんだ」

一方メイさんはなんだか嬉しそうに、あつさつと受け入れてしま

つた。

「あ、えっと旦那さま、何か嫌いなものってありました？」  
そしてシズネは相変わらずマイペースに、話題を一步先へと進めている。

「いや、特に無いけど……」

とりあえず僕は質問に答える。

つて、既に旦那さまって呼ばれるの受け入れてないか、僕？

「カズマあ！」

姉さんも僕の無駄な順応性に気付いたらしく全力で僕の名を叫ぶ。「ほらほらマドカ、二人の邪魔をしない」

いきり立つた姉さんを、ヒロコさんが諭す。

その雰囲気はどこか慈愛に満ちていて、僕とシズネを暖かく見守つてくれているようだった。

……ん？

「だつて、だつてえ！ カズマがあー……」

姉さんが今にも泣きそうな声で駄々をこねる。

「まあまあ、気持ちは分かるけど。今は優しく見守つてやろうぜ？」  
アタシらは、あの子達の姉なんだから  
一方ヒロコさんはどこまでも優しい。

……まるで何もかもが分かっているかのよつ……

「ヒロコさん……」

「ん、何、カズマ？」

「……シズネ、何があつたんですか？」

ヒロコさんなら、どうしてこうなったのかを知っているに違いない。

そう思つた僕は、ヒロコさんに核心を訊ねていた。

「？ ああ、なんだ聞いてなかつたか」

その一言で僕の言わんとすることを察してくれたのか、ヒロコさんは嬉しそうに語り始めた。

「いや、昨日カズマが『あんなこと』を言つたからさ。シズネに

伝えたんだよ。その時の嬉しそうな顔つたら……今思い出してもアタシまで嬉しくなるね」

そう言つてヒロコさんは、本当に嬉しそうな笑みを浮かべた。

「あ、『あんなこと』…………？」

一方で、戦慄するように姉さんがその言葉を拾う。

「ひ、ヒロコさん……シズネに、何を言つたんですか？」

多分その『あんなこと』、が鍵だと直感した僕はそれをヒロコさんに訊ねにいった。

「ん？　ああ、だから昨日……なんだっけな。シズネを彼女にしたい、みたいなこと言つてなかつたつけ？」

「ええええええええええええええええええええええ！」

僕より先に、姉さんが反応していた。その顔には驚きの色しかな  
い。

「ふーん、カズマ、やるじやん。メイも負けてられないかな…………」

一方、メイさんは感心したようにそつ咳く。

そしてその視線は、メイさんの実の兄であるはずのキョウさんに向けられていた……いや、貴女が動くのは倫理的に危ないと思つんですが。

「つて、僕そんなこと言いましたつけ！？」

「とか、他の人に突っ込んでいる場合じゃなかつた。

正直、そんな記憶が僕には無い。

「か、カズマあんたそんなこと言つたの！？」

僕とほぼ同時に、姉さんが激しい口調で僕に訊ねた。

まったく覚えが無い僕は「い、いや記憶に無いんだけど……」と慌てて弁明する。

だが、姉さんは「なんでシズネちゃんなのよ！　おっぱいか！？　おっぱいがいいのかコンチクショウアアアアアアア……！」と聞く耳持たない様子で憤慨している。

「んー？　あれ、言つてなかつたつけ？」

そんな僕たちを見ながら、ヒロコさんは不思議そうにそつ咳く。

もしかしてヒロコさん、何か誤解しているんだろうか。

「僕、なんて言いました？」

「えっと……確か、シズネに恋人が出来たら……って話したよね？」

「……あー」

ヒロコさんの発言で、だいたい読めた気がした。

「なんか言いづらそうだったから、てっきりカズマがシズネの恋人に立候補したいのかと思ったんだけど」

さらに追い討ちをかけるようにヒロコさんが補足する。

その補足で、完全に理解できた。

「ん~……」

僕は一度、姉さんの方を見る。

姉さんは苛立つた様子で、事情が分かつんなら説明なさい、という顔をしていた。

……仕方ない、話すか。

「えっと……それなんですけど。実は一昨日、姉さんが生徒会長に体育館裏に呼び出されまして……」

「え、あの生徒会長に！？」

僕がそう切り出すと、ヒロコさんが盛大に反応した。

あれ、僕が知らなかつただけでやつぱり有名だったんだろうか。

「へえ、アイツがな……」

キヨウさんも感心したように咳いている。

「？ キヨウ、知ってるの？」

と思つたらメイさんは知らなかつたようで、キヨウさんに訊ねていた。

「ああ、なんていふか成績優秀スボーツ万能、まるで理想の人間像をそのまま具現化したみたいな超人生徒会長だ……ってかメイ、知らなかつたのか？」

キヨウさんが、姉さんが僕に訊ねた時みたいに不思議そつにメイさんに訊ねた。

やっぱり学園では常識レベルのことだつたんだろうか。

「メイと同じB組だつた気がするんだが、生徒会長」

と思つていたら、とんでもない情報がキヨウさんから届いた。

それは確かに知らない方がおかしい。

「だつて……キヨウ以外の男になんて、興味ないから」

なんて考えるまでも無く、メイさんの爆弾発言。

ちょっと頬を赤らめて、上目遣い、良く見ると瞳も潤んでいる。うわ、なんていうか超あからさまだ。

これはさすがにキヨウさんでも気付くか……？

でも気付いてしまったら、この兄妹はどうなつてしまふんだろう。

なんだかんだでキヨウさん、メイさんのことを大事に思つているのは間違いないし。

そんな不安に駆られた僕たちは、激しく脱線していふことも忘れて、キヨウさんの次の発言に耳を集中させていた。

しかし。

「……お前は相変わらず、人見知りするんだなあ」

キヨウさんはため息混じりにそう呟くだけだつた。

……とても呆れた顔をしているメイさんが、凄く哀れに感じた。

「えつと……続きを話しますね？」

メイさんに对するせめてもの情けとして、僕は速やかに話題を変えた……といふか戻した。

「えつと、まあそんな感じで姉さんが昨日……呼び出しに応じて」

結局告白はされなかつたので、とりあえず『呼び出しに応じた』

とだけ言つておく。

「で……なんか複雑な気持ちになつちやつて。それで……」

「ああ……だからアタシにそう聞いたわけか。なるほどね」

ヒロコさんはそこまでの説明で合点がいったらしく、確認するよ

うにそう訊ねてきた。

「え……どういうこと?..」

姉さんはまだ理解が追いついていないのか、アワアワした様子で

僕らに訊ねてくる。

シズネもよく分かつてないらしく、きょとんとした表情だった。  
「えつと、だから……カズマはただ、アンタのことを遠回しにアタ  
シに相談しただけ……ってこと。ね？」

「あ、はい」

姉さんに説明してから、ヒロノさんは確認するように僕に振つて  
くる。

その説明には特に間違いも無さそうだったので、僕は素直に頷く。  
「あー……なるほど。そつか、カズマも不安だつたんだね」  
それを聞いて理解できたらしい姉さんが、どこか安心したように  
そう呟いた。

カズマ『も』、といふことは姉さんも不安だつたに違いない。  
なんだかんだでウブな姉弟だつたんだなあ、僕ら。  
気付くと僕と姉さんは顔を合わせて、二人で微笑んでいた。

どうやら姉さんも、僕と同じことを思つたようだ。  
やつぱり僕にはまだ、姉さんが必要なんだろう。

そして逆に……姉さんにも、僕が必要なんだと思えた。

「…………あのー…………」

そんな暖かい気持ちで胸をいっぱいにしていると、ヒロノさんが  
僕たちに声を掛けてきた。

「なんていうか一人で微笑みあつてるとひひひ悪いんだけど」

「? なんですか?」

ちょっとすまなそうに言つたヒロノさんに僕が視線をやると……  
自然に、シズネの姿が目にに入った。

まあ座席の都合上、ヒロノさんの方を向けば延長線上にはシズネ  
がいるので、目に入るのは当然なのだが……気付くと僕は、シズネ  
を見つめていた。

いや、見つめ返していた、の方が正しいだろう。

シズネも、僕の方を見ていたからだ。

その目はどこか不安そうでありながらも、強い意志をその瞳に宿  
しているような、そんな気がした。

僕はその目に惹かれて、声を掛けてくれたのがヒロ・カズマさんであったことも忘れて、シズネに見入ってしまっていたのだ。

「あの……カズマさん」

しかしそれはある意味、間違つていなかつた。

シズネは僕がシズネを見つめ返していることに気付いたらしく、そんな決意に満ちた瞳で僕を見つめて、口を開いた。

呼び方は気付くと元に戻つてゐる。

しかし。

僕を呼ぶときの声色には……むしろ数秒前の『旦那さま』と呼んでいた時よりも、熱がこもつてゐるような気がして。

「カズマさん。だったら、改めて。わたしと、お付き合いしていただけませんか？」

その直後の発言で、それが「気がする」から「確信」に変わった。

続く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2226y/>

---

門真一馬の愛すべき日常

2011年12月31日16時56分発行